

---

# くそたれなヒーロー共

鶏の照焼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

くそたれなヒーロー共

### 【Nコード】

N5806U

### 【作者名】

鶏の照焼

### 【あらすじ】

世界には悪が蔓延っていた。摩天楼の街「メルドビツヒ」もそれは例外でなく、ありとあらゆる悪が幅を利かせていた。

そんな中、街に巣くう悪と戦い続ける二人のヒーローがいた。これはメルドビツヒで戦う、全く性格の違うヒーローたちの物語である。

## ブローグ？ 良い奴

夜。摩天楼の街、メルドビツヒ。

その大通り。

何十もの高層ビルが、天を目指して屹立していた。

先端を尖らせたもの。箱の様に平坦なもの。円と直線を組み合わせたような、デザイナーが悪趣味としか言えないほどの歪なもの。

それらの鉄の塊が神の座に手を伸ばそうとしている中で、それら鉄の城の支配者は、未だに地の底を這いつくばっていた。

歩道はショーウィンドウから漏れる光と街灯によって照らされ、そこを多くの人が歩いていた。夕方より雨が降り続いていたために、彼らの殆どは傘をさしながら身を縮こませて歩き、傘を持っていない者は誰かの肩にぶつかるのも承知で、早足で歩道をかけていった。車道には帰宅ラッシュ時から大分減ったとはいえ、それでも尚かなりの数の車があった。車はそれぞれの目的地を目指してのろのろ進むものと、道端に無断停車してワイパーとフロントガラスの間に違反切符を挟まれているものの二種類があった。

その中を、一台の黒い車が疾走していた。百キロ近いスピードを出しながらそれを緩めることはなく、前方に見える亀の様に動く車の間を、大きく尻を振りながら縫うように蛇行する。一方通行車線はおろか歩道にも乗り上げ、リアタイヤによる派手な水しぶきを通行人に献上しては怒号を浴びせられていた。

しかしあのドライバーにそんなものに構っている余裕はなかった。黒く四角いサングラスを身に付けた男が、恐怖に青ざめた顔でバックミラー越しに背後を確認する。そしてそのすぐ背後に一人の人影を確認した時、彼は滝のような汗を流しながら今までよりも強くアクセルを踏んだ。

背後から車を追うその追跡者は、スマートな体を純白のタキシードと帽子で身を包んでおり、それは濁った黒に染まった街の中에서도映えて見えた。

そんな見た目は紳士的な彼だが、その追跡方法は車のボンネットを足場にして、そこを一足飛びで飛び回ると言う迷惑にも程があるものだった。

「申し訳ありません！ただ今非常事態が発生しております！申し訳ありません！」

びよんびよん跳びながら手にした拡声器で頻りに謝ってはいるが、正直フオローになっていない。

ある車のボンネットに着地すると同時に拳がボンネットにつくほど膝を大きく曲げ、それを伸ばす反動を利用して前に大きく飛んで次の車に移る。着地の衝撃を感じたドライバーは何事かと思いきや身を乗り出して見上げるが、その白い紳士の姿を見た途端「なんだ、あんたか」と安堵のため息を漏らす。このように彼に愛車を踏み台にされながら、怒る者は誰もいなかった。

彼はこの街を守るヒーローの一人だったからだ。

そのヒーローの執拗な追跡の前に、前を行く黒づくめのドライバーは恐怖と驚愕ですっかり青ざめていた。

彼はこの街にあるチンピラに麻薬を売りつけるために外の街からやってきた売人だった。

当然この街のヒーローのことなど何も知らない。ヒーローの話は最初に聞いた時でさえ、相手はただの一般人だろうと高をくくっていた。だが今日の午後三時、街外れにある北西の工場 取引現場で待ち構えていた奴と出くわしてから（相手方の取引相手は既にしよっぱかれていた）今に至るまで、奴は諦めることなく自らを追いつけていた。

その工場から森林地帯、郊外の住宅地を抜けて今走っている街の

中心部まで、あの白服はどこまでも追いかけてきた。その肉体的精神的タフネスさに、彼は半ば負けかけていた。

それでも自首する気が無かったのは、彼にも今までの経験からくる犯罪者としてのプライドがあったからだだった。絶対に奴を振り切つて、この街からオサラバしてやる。

だが、それは叶わなかった。

信号を無視して大通りを直進しようとした際、真横からコンボイトラックがと走行してくることに男は気付かなかった。

トラックのバンパー部分と黒い車の右側面が接触し、その直後、派手な音と鉄くずの破片をその辺りに撒き散らす。トレーラーはその場で急ブレーキをかけたが、車はギャグマンガで見られる車に轢かれた人間の如くその場で一回転し、全身ボロボロになりながら何事も無かったかのように正位置で着地する。

歩道前で止まっていた車の上にいた紳士服の男が、そこから一足飛びで事故を起こした車の前に降り立つ。中の男は完全に放心しきっていた。

すると左の方からサイレンの音とともに、白と青で塗り分けられた車が二台ほど連なってこちらにやってくるのが見えた。警察車両だ。

「どうぞ。こいつです」

紳士は車の中から男を引きずりだし、目の前で停止したパトカーから出て来た警察官二人にその身柄を引き渡す。

「相変わらず仕事が早いですな。我々も見習わなくては」

警官の一人が、お世辞抜きに素直に賛辞を述べる。紳士は謙遜して、顔を若干赤らめながら言った。

「いえいえ、犯人一人捕まえるのにこれだけの被害を出してしまっただんです。僕もまだまだですよ」

「なにをおっしゃる。この程度、奴に比べればなんてことありませんよ。なあ？」

「ああまったく。犯人の車をロケット砲でふっ飛ばさなかっただけ、

あいつよりずっといいですよ」

「や、それはまあ、はははは……」

この街に存在するもう一人のヒーロー……彼の友人のことを引き合いに出され、紳士が苦笑いを浮かべる。そして何かを思い出したように、紳士が警官に言った。

「では僕はこれで。その男は任せます」

「ええ。後は任せてください」

警官がその言葉を言い終えない内に、紳士が足早にその場を走り去る。その様子を見ながら、警官二人が感慨深げに言った。

「いやあ、相変わらずの手際だな」

「ああ。流石はマックス・キッドと言った所だな」

大通りから暫く進んだ先にある、人気のない路地裏。そこでマックス・キッドと呼ばれた男は、自分の身につけている物をそくさと脱ぎ始めた。そして予めそこに隠してあったリュックサックをひっぱりだし、中から「普段の自分」が着ている服を取り出した。

「やれやれ、今日はえらい時間がかかったな」

タキシードを畳んでリュックの中に入れ、水色のシャツとズボンを身につける。シャツの胸ポケットに入っている眼鏡をかけた所で、男がふと呟いた。

「あいつ、また滅茶苦茶やってないだろうな……？」

警官の話していた友人のことを考え、彼の胃はキリキリと痛み始めていた。

## プロローグ？ 悪い奴

この世には二種類の人間がいる。

「正義」をなす奴と、「悪」をなす奴だ。そして正義でも悪でもない奴は「人として」生きていることさえしていない。人間にすら値しない。屑だ。

世界に蔓延るのはそんな悪と屑だ。悪と屑ばかりが幅を利かせ、この世を良いように牛耳ろうとしている。そしてそれは、この街においても例外ではない。

そんな糞たれの街で、俺はヒーローをやっている。理由は簡単だ。悪を潰すため、正義を行う一握りの者を助けるためだ……。

霧雨が鬱陶しく降りつけるこの天気では、つい余計なことを考えてしまう。思考を切り替え、己の仕事に集中する。

目の前には直線に延びた、地下へ続く階段がある。その階段の先、重苦しい青色の鉄扉の向こうには、件の悪と屑どもの巢窟が広がっている。今日、そこで悪の連中による祭りが開かれることになっていた。屑はどうでもいい。

濡れたブーツで、鉄製の階段を一步一步踏みしめる。ゆっくりと、確実に奴らとの距離を縮める。扉に近づくにつれて、悪に対する怒りで頭が破裂しそうになる。

自分自身に冷静になるよういつけながら、扉の取っ手に手をかける。

使命を果たす時間だ。

霧雨がしつこく街を濡らす。街灯は無く、周りの建物から漏れる光だけが、その路地を頼りなく照らしていた。いつもは不良や酔っ払いのたむろす程度のこの平和な地は、今はある一点を中心にして、一種場違いな雰囲気包まれていた。

階段の下り口を中心に、複数のパトカーがサイレンを鳴らしなが

ら、そこを包囲するように展開されていた。その周りで、何人もの警察官が雨に打たれながら、自分の職務を全うしていた。野次馬はいたが、元々人通りの少ない所だったので数人しかいないのがせめてもの救いだっただけだ。

「何人やられたんだ？」

がっしりした体を青い制服で包み、腰に拳銃と警棒を提げて頭に警察帽をかぶった中年の男が、隣に居た若い部下に話しかけた。同じ格好に身を包んだ部下が、周囲を厳重にテープで封鎖された鉄階段の方を見ながらそれに答えた。

「えー、事件発生時にあの場に居たのは客、店員含めて六十五名。うち襲撃を受けたのは五十九名です」

「殆どじゃないか。まあ予想はしてたが」

「襲われた連中は全員重傷、今は病院に搬送されています。しかし死者は出ていません」

「不幸中の幸いだな」

そう言って、中年の警察官が階段の反対側のレンガ造りの建物に背中を預けて立っている一人の男に目を向けた。

「相も変わらず熱心なことだな？ ええ？」

「……」

「なんとか言えよ、ヒーローさんよ」

ヒーロー 頭を剃り上げ、黒いサングラスで目を隠し、白いコートで身を包んだ長身の男が顔を上げて、感情の無い、雨よりも冷たい口調で静かに言い放った。

「今日は死人は出ていない」

「それはそうだが、今はそれは問題じゃねえ。お前一体何人に暴行加えたと思ってるんだ？」

「五十九だ」

事実だけを淡々と告げる、機械のような、人間とは思えないぞつとする語り口だった。中年が眉をひそめながら、のしのしと禿頭のヒーローに近づいて言った。



「今日俺たちは、あの酒場でギャング連中が麻薬の取引をするという情報を得ていた。お前がマークしてたのも恐らくそいつらだろう？」

「ああ。それが？」

「実際あそこでブツの取引を行っていたのは八人だ！なのに何でお前は、残り五十一人の人間にまで危害を加えたんだぞ！女子供も見境なしに！」

「奴らが悪だったからだ」

「……またそれが。あいつらが何したってんだ？」

ヒーローがサングラスの奥から、背筋が凍るほどの殺気を乗せた視線を男に向ける。これがヒーローの雰囲気か？男はこのヒーローに会ったびに、こうしてこのヒーローに対面するたびに、いつも内心でぞつとしていた。

そんな男の考えなどお構いなしに、ヒーローが話し始めた。

「カウンターで飲んでいた長髪の男。奴は俺が来た時に酒の代金を払わずに店を出ようとした。悪だ。その男の隣でジンを飲んでいた六人グループは全員未成年だった。悪だ。テーブル席に座っていた女は、赤ん坊を抱えたまま酒を飲んでいて。悪だ。隅に固まっていた老人連中は、ウェイトレスにストリップをやらせようとしていた。ウェイトレスは嫌がっていた。奴らは悪だ。真ん中に陣取っていたカップルはセックスの真っ最中だった」

「悪か？」

「悪だ」

「いいじゃねえかそれくらい」

「駄目だ。そういうのは家か、ホテルですればいい。酒場は酒を飲む場所だ。ああいうことをする所ではない」

「潔癖すぎるんだよお前」

そう言っただけで中年男が口を尖らせていると、向こうの方から人垣をかき分けて、小柄でメガネをかけた一人の男がこちらにやってきた。  
「ゴードン！」

メガネの男が、禿頭の男を見るなり一喝する。禿頭　ゴードンはそれを気にもしていないようだった。

「ああ、あんたか」既知の仲のように、若い警官が言った。

「彼、またやったのかい？」半分うんざりしながらメガネの男が言う。するとゴードンが慥然とした口調で、メガネの男に返した。

「余計な御世話だ、ダニエル。いつからお前は俺の保護者になったんだ？」

「そついうのが嫌なら少しは自重してくれ。活動するたびに警察に睨まれるヒーローなんて聞いたことが無い」

「まったくだ。お前が仕事熱心なのは感心するが、毎度毎度やりすぎるのが玉に瑕だ」

中年の警官がそつ言つて二人の会話に割り込んで、ゴードンの腕を掴む。

「何をする気だ？」

「署まで来てもらおう。暴行および営業妨害その他もろもろの容疑で、お前を連行する。これももう慣れっこだろう？」

「貴様」

「キースだ。いい加減覚えろ。さ、行こうか」

そつ言つてキースがゴードンを強引にパトカーの前まで連れて行き、彼を車内に押し込んでドアを閉める。

その、今となつては一種予定行事と化した光景を前に、ダニエルは大きく肩を落とした。

## ブローグ？ まともな奴といかれた奴

キャプテン・スクリーム。本名ゴードン・ボルト。

マックス・キッド。本名ダニエル・クーパー。

この二人は、この街を代表する二大ヒーローだった。彼らは昼夜を問わず活動し、悪の組織からヤクの売人まで、蛆虫のように蔓延る数多くの犯罪を叩き潰してきた。それゆえに、彼らの名を知らない者はこの街にはいなかった。そして品行方正にして弱きを助け強きを挫く、ヒーローの鑑ともいえるマックス・キッドとは対照的に、ゴードン　キャプテン・スクリームはまた違う角度から高い認知度を得ていた。

やりすぎるのだ。とにかく自らが悪と定めた者に対しては殴る蹴るでは済まさない。鈍器を使つて頭をかち割り、倒れた相手の鳩尾を踏みつけて肋骨をへし折り、酷い時には腹に散弾銃を押しつけて引き金を引いたりコンクリート詰めにして港の埠頭から叩き落したりと、その破壊活動には枚挙にいとまがない。死人も見えていない所でかなりの数を出していた。それでもその悪に対する容赦ない攻撃を讃える声が上がっているのも事実であり、彼の破壊活動に対しては賛否両論だった。

そしてそれ以上に彼を問題児たらしめているのが、彼の善悪の判断が極端すぎるという点だった。ある人が道端に痰を吐く所を見ただけで、その相手に追い付いて顎の骨が砕けるほどのパンチを見舞わせる必要が、果たしてあるだろうか？その容赦のない態度故に、裁判沙汰にまで発展したことも何度もあった。だが彼は止めなかった。

そしてそんな彼のストッパーになることが、彼の友人であるマックス・キッド　ダニエル・クーパーの仕事の一つであり、「正義をなした」彼を署に連行して滔々と警告するのが、この道二十五年のベテラン、キース・モーガン刑事の専らの仕事であった。

「おいキャプテン・スクリーム。いい加減観念したらどうなんだ？」  
四方をコンクリートに囲まれた、狭苦しい取調室。真ん中に安っぽい机が一つとパイプ椅子が一組置かれ、そこにキースと、サングラスを外したゴードンが向かい合って座っていた。

ゴードンの刃物のような水色の瞳を見返しながら、キースが言った。

「お前は悪を懲らしめる素質はあるんだ。ただそれを過剰なまでに発露しちまうのがお前の悪い癖なんだよ。お前は信号無視した老人にまで手を上げる気か？」

「ああ」

「相手を考えてよ。年寄りだぞ？せめて口で解決しようとか、そういう風には考えたこと無いのか？」

「ないな」

迷いの無いゴードンの言葉に、キースががつくりと項垂れる。こいつには何を言っても無駄なのだ。

いや、本当はこういう結末になることくらい、キースも知っていた。こうしてゴードンに警告をするのも四十を越えた今となっては、このやりとりは予定調和の一つと化していた。ゴードンは己のしたことに絶対の自信を持っている。絶対に折れないのだ。

しかし捕まえることなど出来るわけがない。彼が犯した暴行や殺人の件数など、軽く叩けば今以上の数が出てくるだろう。だが今まで彼が手にかけてきた人間の中には、闇社会にその名を轟かせる超一級の犯罪者や犯罪組織もゴロゴロしており、彼が街の治安維持に一役買っているのは疑いようのない事実だった。それに自分たちは未成年だから法律では裁けないのだ、警官が子供を殴るのかだの言っ、やりたい放題やっている不良連中をこいつが一方的にのしていく様を見るのは、キースにとっても幾分か胸のすくような思いがした。

だからと言って、ゴードンもそれで諦めるつもりはなかった。自

分が言わねば、一体誰がこいつに忠言すると言うのか？これは自分が警官だからとかいうのではなく、もはやキース個人の意地といっても良かった。

「懲りないのはお前の方だ。俺が悪を縛るたびに俺を拘束して、何かメリットでもあるのか？」

「俺だってこんなことしたくない。お前がちゃんと手続き通りに行動してくれば、俺だってこんな風に――」

「お前らの言うとおりにはやっていたら全てが手遅れになる。悪は見つけ次第摘み取らなければ、やがて世界全体を腐らせていくだろう」  
ゴードンが真顔で言いきる。奴の言い分もまた的を得ている所が、キースには齒がゆかった。

と、不意にキースが向かい側の壁にかけてあった時計に目をやった。午後九時二十五分。

そろそろか、とキースが思った。この時間にゴードンを拘束しているとは何が起こるのか、キースはこれまでの経験から知っていた。それは出来ることなら絶対に出会いたくない男との会合を意味していた。

不意に取調室前の廊下が騒がしくなる。遠くから靴が床を叩く乾いた音が響き、それが次第に大きくなっていく。それに伴って警官たちの上げる声が次第に数を増やしながら、大きく膨れ上がっていく。

声が叫びに、次いで罵声と怒声に変わっていく。それでも靴の音は変わらずに、段々とペースと音量を上げながら響き続ける。そして声のテンションが高まる中で靴音が一際高い音を鳴らしたきりピタリと止まり、その直後に取調室のドアをぶち破って一人の男が姿を現した。

「おおキャプテン・スクリームよ！その姿は一体どうしたことだと言っただい！」

「……パーシー」

パーシーと呼ばれた金髪散切り頭で喪服姿の男が、キースのため

息を無視して続けた。

「これはいけない！天下のヒーローがこのような狭い所に閉じこもっているのは色々な意味でよろしくない！君がここに閉じこもっていることで地球のエネルギーバランスは崩れ、この世に破滅が訪れると言っことを理解していないのか！」

「俺に言うな。奴に言え」

「キース刑事よ！彼をここに入れることが、この世界にとってどれだけのマイナスとなるのか考えたことがあるのか！破滅の魔王ゴリアスの手によってエネルギーの均衡は崩れ、ヴォイニクス領域が拡大することによってこの世は終焉を迎えることになるのだぞ！」

意味が分からない。うんざりしながらキースが言った。

「そのゴリアスってのは、いつ来るんだ？」

「明日だ！すぐにでも奴はやってくる！このままでは人類は終わりなのだ！何もかもが終わりなのだ！」

パーシーが朗々と言い終えた時、半壊した入口から何人もの屈強な警官が押し寄せ、パーシーの全身を力づくで拘束し始めた。その彼らの顔には生々しい青あざがあった。

「この野郎！観念しろ！」

「ブタ箱にぶち込んでやる！」

「化け物みたいな腕力じゃがって、こいつ！」

両腕を後ろに回され、強引に膝立ちにされながらも、それに負けじと喪服の男が叫んだ。

「よさないか諸君！どうせ明日には人類は滅びるのだ！ならばいつそ、今日くらいは手を取り合って同じ星に生きる兄弟として一日を過ごそうではないか！」

パーシー・デク　ゴードンの友人兼病的終末論者の叫びが取調室にこだまする。キースは世界の終りでも見るかのような黄昏な表情でその光景を見つめていた。

「終わったら起こせ」

ゴードンは腕を組んで椅子に腰かけたまま寝息をたてていた。

## 第一話 ？

世の中には、犯罪をしてやろうと息巻く連中が何人も存在している。彼らは表を堂々と歩きながら、まずは血走った目で何をしてやろうかと辺りを観察する。そしてめばしい物を見つけた時、彼らは罪に飢えた獣となって行動を起こす。衝動的に行動に移す者もいれば、計画を練りに練ってから実行に移す者もいる。

しかしこの世には、そのような「やってやる」などと意気込むまでも無く、まるで息をするのと同じように、ごく自然な動作で犯罪を犯す者もいるのだ。その場合、彼らは犯罪を犯しているという実感を持つことはなかった。いちいち「息をしている」と考えながら呼吸する人間がいないのと同じである。

「……」

そのようなことを考えながら、一人の人間が、ゴードンが騒ぎを起こしたのは違う路地でそっと佇んでいた。

全身を雨に濡らし、力無い目で闇色の空をみつめる。

「……」

ふと、一つの考えが頭の中に浮かんだ。

殺人も犯罪の一つだ。ならば息をするように人を殺すのは、息をしているのと同じで、生理現象として捉えられるのではないか？それをやる本人としては「当然のこと」としてそれを行っている訳だから、犯罪ではないのではないか？もしこれが犯罪だと言うのなら、全ての人間は息をただけで捕まってしまうからだ。

「……」

足元に転がるモノに視線を移しながら、人影が考え込む。

真っ赤な水たまりが眼下に広がっていた。

## 第一話　　？

ゴードンが捕まった、その翌日。早朝。

ダニエル・クーパーは、足に鉄球をつけたかのような重い足取りでその道を歩いていた。

そこは街の南東にある、寂れた感じのする緑一つない住宅地で、道路と歩道の境界には街灯が規則的に配置されていた。

両側にはコンクリート拵えの二階建ての建物が不規則に並んでおり、家々の間にはゴミを詰め込んだポリタンクが放置されていた。その蓋の上の一つで、でっぷり肥った猫が横たわりながら呑気そうに欠伸をしていた。

朝早くということもあり、ダニエルの周りには人影はほとんど見えなかった。家々は静まりかえって生活の匂いは無く、無音に包まれていた。少し肌寒い風が足元を通り過ぎ、空しい音を立てて周囲の砂利や埃を掃き飛ばす。その情景は、まるでこの世から人間が消え去った後の世界を見ているかのようなうた。

そんな表向きは死の街と化した場所を、ダニエルは藍色のスーツの上に茶色のトレンチコートを羽織り、死者の行進を一人で実践するかのよう背を丸めて黙々と歩いた。

目的の家は、そんな住宅地の一角にある二階建ての一軒家で、白い外壁と赤さびた扉が印象的だった。窓は二階部分にしか見えなかった。

ドアの横にあるインターホンを押し、暫く待つ。するとそこから軽い感じのする男の声が聞こえてきた。

「はい、どちらさまで？」

「ダニエルだよ」

「やあ、ダニエルか！ダニエルならダニエルだと言ってくれればいいのに。今ロツクを外すから少し待っていてくれたまえダニエル」



そう言つてインターホンのマイクが切れると、ガチャリと、扉の奥から鍵の外れる音が聞こえてきた。そして半開きになった扉の向こうから、パーシー・デクが歯を見せて笑いながら言った。

「やあダニエル。ダニエルじゃないか！ 詰る話もあるだろうが、とりあえず中にはいらたまえ。寒かろう」

「ああ、そうさせてもらうよ」

パーシーの家は、外見よりもずっと綺麗だった。玄関と一続きになつてリビングには赤い絨毯が敷かれ、その中央に向かい合うようにソファとテレビが置かれ、両者の間にテーブルが配置されていた。左奥には本棚と二階へ続く螺旋階段が、右奥にそれぞれは風呂、トイレ、台所に通じる廊下があつた。そしてリビングのソファの上に、ダニエルとパーシーを引き合わせた張本人が寝つ転がつていた。

「彼は相変わらずだな」

「ゴードンを責めないでやってくれ。彼は家も持たずにこの世の悪と戦っている、孤高のヒーローなのだから！」

「君の資産を食い潰している男でもかい？」

「金など問題ではない！ なぜなら今より二年と八カ月と十五日後には、大いなる悪魔ベベデが降臨し、この世を破滅に導くからだ！」

「……病院に行った方がいい」

「だが彼が活躍すれば、それだけ破滅の期限は延びていく。彼こそ至高の存在なのだ！」

ダニエルを無視し、まるで自分のことのようにパーシーが自信満々に言い放つ。そもそもゴードンは、数年前に家賃滞納でアパートを追い出されており、その結果としてこうしてパーシーの家に転がり込んでいるのだつた。今も家賃など払っていない。

洗濯も料理も出来ず、字さえまともに書けない。自活能力皆無である。だが彼はそれを全く気にしていない。それでも悪を潰せさえ出来れば、他のことなどどうでもいいのだ。

そしてダニエルがパーシーと知り合つたのも、ゴードンがさも自

分の家のようにここを作戰會議の場所として指定したからであり、目の前に居る変人から事の真相を聞かされた時、ダニエルは相方のその傲岸不遜さに開いた口が塞がらなかった。

「まったく、君も君だ。どうしてあんな男を何年も住まわせていられるんだ」

「それを言うなら君だって同じことだ。どうして彼のような変人と何年も友人でいられると言うんだ？あの正義狂いの変態と」

ダニエルの追及に対して、自分のことを棚に上げてパーシーが勝ち誇ったように言つてのける。お前も同類だろうとダニエルが言おうとした時、ソファに横たわっていた男がゆっくりと起き上がった。「うるさいぞ。おちおち寝てもいられない」

「君という男は……」

こちらを見ようとせすに言い放たれた遠慮を知らないゴードンの言葉に、ダニエルは憤慨する気も起きなかった。まったく、なぜ自分はこんな男と友人になつたのか？今でも信じられなかった。「何だ、ダニエルか。やけに騒がしいと思つたら、お前がいたのか」やつとゴードンが首だけ動かしてこちらを見る。そしてなんでここにいるんだと言外に告げるゴードンに、ダニエルがむつとして言つた。

「ああそうだよ。朝早くに君が解放されたと聞いたから、こうして様子を見に来てやつたんだ。少しくらい歓迎してくれてもいいんじゃないか？」

「……ああ、そうだな。すまない。要らぬ心配をかけた」

ダニエルの言葉に対しそう言つてゴードンが立ちあがり、素直に頭を下げる。人一倍善悪に敏感な彼だからこそ、自分に非があつた時は真つ直ぐにそれを認めて謝罪をする。その素直さこそ、ダニエルの知る彼の長所の一つだつた。尤も、それが他人に発露した所をダニエルは見たことが無かつた。

「ふふん、やはりゴードンは常識を弁えているな。それこそ後の神ならぬ世で生き抜くための秘訣の一つだ。ダニエルよ、君も見習い

たまえ」

「君こそ彼を見習って少し静かにしたらどうなんだ？ 誇大妄想もいいが、あまりそういうことを声高に言わない方がいい」

「妄想ではない！ 僕の言葉は、すべて真実なのだ！ なぜなら僕の言葉は、そう、僕が夜ベッドの中に入った時に」

パーシーが得意げに話し始めた時、不意にインターホンのブザー音が室内に鳴り響いた。視聴者二人の意識はすぐにそちらに向いたが、演説者はそれに気付くこと無く、言葉を通して自身の世界に入り浸っている。

「僕だって、最初は夢か、たちの悪いいたずらかと思った。しかしその閃光は次第に強さを増し、それと同時に、僕の頭の中で何か鐘の音のような音が響いてきたんだ！」

変態な友人の論説を勤めて受け流しながら、ゴードンが顎で扉を差す。ダニエルがため息交じりにドアの側まで近づく。

「どちらさまですか？」

「『ハザナエルだ』」

ドア越しからか弱い女性の声がした。

「あの、私トレイル家でメイドをしています」

「トレイルですって？」

「光の中から声がした！」

「ゾフィーと申します」

「『私は天使だ！』」

ダニエルが黙ったまま、親指だけを立てた右手をゴードンに見せそれを百八十度捻る。ゴードンが頷き、直後に鈍い音が部屋の中に響く。何かの倒れる音。

間。

やっと静かになった。軽くなった気分でダニエルが言った。

「ゾフィー、さん、ですか？ 今日はい体、どのような御用件でこちらに？」

「はい、あの、実は、こちらに伺えば、この街のヒーローに出会え

ると聞いたので」

「サインならお断りですよ」

「ち、違います！今日は、大切なお話があって来たんです！」

インターホン越しに女性が声を荒げる。どうしたものかとダニエルがゴードンを見る。好きにしると言わんばかりにゴードンがパーシーを抱え、無言で二階に上がる。

「とても、とても大切なお話なんです！私の勤めている家が大変なんです！助けて下さい！」

ゾフィーが縋るように言ってくる。そしてそれ以上に、ダニエルはトレイルという言葉が引っかかっていた。ひょっとして、彼女の『勤め先』は。

好奇心が打ち勝った。ダニエルが言った。

「わかりました。詳しい話は、中で聞きましょう」

## 第一話？

ゾフィーと名乗った女性は、青いロングヘアに小さい水色の瞳をもった、小柄な女性だった。

ヒーローでありながら探偵まがいのことをしている自分に苦笑しながら、コーヒーの入ったカップを手渡す。いや、ヒーローも探偵も根っこは変わらないのか？

くだらない思索を打ち切って、ダニエルが話を切り出した。

「僕はダニエル・クーパーです。ダニエルと呼んでください。巷ではマックス・キッドと呼ばれています」

「あの、本名ばらしちゃっていいんですか？」

「僕の知り合いのヒーローに、プライバシーに厳しい奴がいますね。僕たちの私生活をすっぱ抜こうとした奴をそいつが締め上げてから、誰も僕たちに干渉しなくなっただけですよ」

今から数年前。キャプテン・スクリームとマックス・キッドの正体がゴードンとダニエルであるということを週刊誌に暴露されたことがあった。ゴードンはそれを見るなり、まずその記事を書いたライターを半殺しにし、警告文と共にその週刊誌を発行している会社の前に投げ捨てた。それでも「ヒーローの二十四時間」シリーズと題してプライバシー侵害を止めなかったその会社に、ゴードンはダイナマイトを投げ込んだ。社長の家とその暴露記事を書いていた記者の家には毒ガスを流し込んだ。

それ以来、彼らの正体に触れようとする者はいなくなった。

「それで、大切な話とは？」

「は、はい。じつは、私の勤め先のトレイル家でのことなのですが、そう言ってから、ゾフィーがカップを両手で持って中のコーヒーをゆつくりと啜る。そして手に取ったカップをまじまじと眺めてからそれをテーブルに置き、ゾフィーが話し始めた。

「そもその始まりは、数ヶ月前、その時のトレイル家当主であり、

トレイル・グループ名誉会長でもあったゼオン・H・トレイル様が逝去されたことでした　ダニエルさんは、トレイル・グループという名は、聞いたことがありませんか？」

「ええ、勿論存じておりますよ」

知ってるも何も、ダニエルはその名を一度として目にしない日は無かった。いや、この世界に住む殆どの人間が、一度はその名前を聞いたことだろう。

トレイル・グループとは、自動車産業で世界八十パーセントのシェアを誇る超巨大企業のことだった。そして最近では車だけでなく、電車や飛行機、果ては戦車や戦闘機などといった軍事部門にまで手を伸ばしている。そして宣伝活動にも力を入れており、そのおかげで街を歩けばトレイルの巨大な看板に出くわし、テレビをつければほぼ高確率でトレイルのCMを見ることが出来る。

しかし、目の前の女性が本当にそんな所に居たのだろうか？なぜトレイル家の人間ではなく、メイドである彼女が来たのか？トレイルの名を騙ったいたずらかもしれない。ダニエルは若干警戒しながら言った。

「まさか、本当にあのトレイルなんですか？」

「はい。私はトレイル・グループの職を辞して隠居生活を送られていたゼオン様のお世話をしていました。これ、証拠の写真です」

そう言って、持っていたハンドバッグから一枚のポラロイド写真を取り出した。そしてそれを見たダニエルが思わずうなる。

そこには元気そうに立っている老人とゾフィーが、庭園を背景に仲よさそうに横並びに映っていた。

「あなたの隣に居るの、ゼオン社長じゃないですか」

テレビの経済ドキュメント番組で見た顔を思い出しながら、ダニエルが言った。撮ってすぐに現像されるポラロイドだから偽造のしようもない。これで彼女が本物のトレイルに仕える人間だと言うことが明確になった。

「ゼオン様は、私を実の娘の様に可愛がってくださいました。なの

で自然と、ゼオン様のお世話は殆ど私が一人で行っておりまして」

「だからあの写真はあかもフレンドリーなのか……しかし、ゼオン氏が亡くなったというニュースは、聞いたことがありますか」

「ゼオン様のご意向なんです。自分が死んだら誰にも言わず、まずは身内だけで葬儀を行う。そしてしかる後に世間に公表すると。私は特別に、その親族のみの葬儀に出席させていただきました。」

それで、ゼオン様がお亡くなりになった後なのですが」

「はい」

「葬儀を済ませた後、親族が一同に介して遺産相続の話になりました。私はゼオン様の遺言どおりに、その時の進行役を務めていました。ゼオン様には妻と、お二人の兄弟がおられました。三人はゼオン様の遺書通りに、公平に遺産を分配することをお決めになりました」

「口論とかは起きなかったんですか？遺産の分配とかで」

「いえ、そのような事は一度も起きませんでした。そもそもゼオン様のご家族が口論を起こす所など、私は今まで見たこともありません」

きっぱりと言い切るゾフィーに、ダニエルは心の中で驚嘆した。

普通、こういう金持ちの家とかでは、遺産の話で大抵もめるものと思っていたからだ。自分の感覚が間違っているのか？

「しかし、先程からお話をうかがっていると、対して危険な事が起きている風には思えないのですが」

「いえ、本当の危機は、この次の日に起きたんです」

そう言って両手をこね合わせながら、ゾフィーが顔を俯かせる。

そして暫くして、意を決したように顔をあげて話し始めた。

「ゼオン様の御兄弟の一人　兄であるラモン様が、自室でお亡くなりになっていたんです」

「なんですって！」

思った通りだ！口から出かかった言葉を抑えつけながら、ダニエルが言った。

「ラモン様は寝間着姿で、ベッドの上で腹部から血を流してお亡くなりになっていました。警察の調べによると、ラモン様は鋭利な刃物で刺されたとされています」

「まさか、失礼とは思いますが、それは身内の犯行なのでは……？」

「それは違います。ラモン様の死体が見つかった数時間後に、電話がかかってきたんです。電話の声の主は、私と同じくトレイル家で執事をしていたバツシュ・ウッドという男でした。バツシュは、ゼオン様がお亡くなりになる四日前に暇をもらっていました」

「それで、その男はなんと？」

「バツシュは自分の名前を言ってから、電話越しに、ゼオン様の遺産を全て自分に寄越せ、さもないければ一家を皆殺しにすると出てきたんです」

「まさか、ラモンとか言う人が死んだのも」

「おそらく、そのバツシュがやったのだと思います」

「そこまで聞いて、ダニエルは大体のことを理解した。テーブルに手を置いたゾフィーに向かって、尋ねるように言った。

「なるほど、つまり、そのバツシュという人を捕まえてくれと」

「はい。勿論、宿泊施設や食事の方はこちらで全て手配させていただきます。協力していただけないでしょうか？」

「事情はわかりました。しかし、警察には話したのですか？」

「表ざたにはできません。ゼオン様のご意向に反してしまいます。

「ラモン様の件は自殺ということで警察には納得していただきましたし、こうして私がこちらに出向いたのもその理由ゆえです」

「あ、そうか」

思い出したようにダニエルがそう言って、さてどうしたものかと顎に手を置いて考える。協力はしたいが、この街を空けていいものか。女性を疑う訳ではないが、今の話が全て真実だとは限らない。するとダニエルの背後から階段と擦り合うように靴音を響かせながら、刺すような低い声が朗々とリビングに響き渡った。

「わかった。協力しよう」



「ゴードン！」

後ろを振り向いて声の主を見たダニエルが思わず叫ぶ。

「いいんですか？」

「ああ。悪を倒すのが俺たちの仕事だ」

「ありがとうございます！」

「おいおい、街の方はどうするんだよ」

「昨日の時点で、めばしい連中は大方狩りだした。残りはチンピラ連中だけだ」

「そいつらも悪じゃないのか？」

「奴らは警察でもやれる。こいつは出来ない。そう言うことだ」

そう言っつて真っ直ぐ玄関へと突き進むゴードンを見て、ダニエルがため息をついた。一度言い出したら聞かない。

この男の短所の一つだ。

## 第二話 屋敷と人殺し？

ダニエルたちが波止場につく少し前、キースとその部下たちは、路地裏に捨てられた仏を前に十字を切っていた。

「ひでえことしやる」

その周囲には、まるで俗世とそこを区切るように黄色いテープが張られ、その隔離された死の領域の中で、捜査員たちが黙々と仕事に取り掛かっていた。死体の縁をなぞるように白線が引かれ、血痕を覆うように丸が描かれ、カメラのフラッシュが至る所で焚かれる。誰も彼も無言だった。

コートのポケットに手をつ込み、その見慣れた、死者を主役にして行われる儀式を前にキースが吐き捨てる。そう言う彼もまた、その異常な領域の中に身を預けていた。すると若い部下が彼の下に駆け寄って来て、苦い顔で言った。

「死因は恐らく、刃物で心臓を一突き。即死でしょう」

「見りゃわかるよそんなことは。他に外傷も無いしな」

「ここでは見たことのない顔です。キースさんは見覚えありますか？」

この街で悪名を轟かせている奴ではないと暗に告げてくる。それを聞いたキースがゆっくりと死体の側まで近づき、腰を下ろしてその顔をまじまじと見つめる。

短く切った金髪にやや面長の顔。細長い眉。切れ長の瞳に薄い唇。大体二十代前半だろうか。生きていたらさぞやハンサムだったろう。だが今、彼は憎悪とも驚愕ともとれる表情だけを残し、この世から永遠に旅立ってしまった。まだやりたいことは沢山あったろうに……。

「みたことねえよ」

様々な意味を込めながらキースが呟く。そして彼がどくと、入れ替わりに寝袋状のビニールシートを抱えた男たちが男の前に傳き、

その体を丁寧にシーツの中に収めて縦に走ったファスナーを閉める。テープをくぐって娑婆の領域に立ち戻り、肺にたまった死臭を追い出そうと煙草に火をつける。そして一息ついた所で、思い出したようにキースが部下に言った。

「ところで、あいつらはどうしたんだ？」

「あいつらとは？」

「例のヒーローだよ」

「ああ、まだ寝てるんじゃないですか？まあ、このくらいのことでヒーロー動かしたら、警察の名が廃っちまいますよ」

ヒーローは便利屋ではない。警察では手に負えない事件を彼らに代わって解決する、ある意味街の切り札であるのだ。だからといって、警察も手に負えないからといって、すぐに彼らに頼るような真似はしない。警察にもプライドはあるのだ。

そう言外に告げる部下の言葉に苦笑しながら、キースが言った。

「まあ、そうだよな」

俺たちだって街は守れる。キースはそう自分に言い聞かせた。そして両手で顔を叩いて気を引き締める。これからやるべき仕事は山ほどあるのだ。

殺人犯め、今に見ている。

## 第二話 屋敷と人殺し？

長いとも短いとも言えない微妙な船旅の後、三人は対岸で待ち構えていたリムジンに乗った。黒塗りのリムジンは対岸の街を外れて緩やかな坂を上り、やがて鬱蒼と木々の生い茂る獣道の中を走っていた。その間、ゾフィーはどこかと連絡を取っていた。恐らく、残された親族の所に報告をしているのだろう。

「ワアオ」

そして暫く走った後に目の前に見えた物を見て、ダニエルが思わず感嘆の声を発する。

それは見るも立派な二階建ての洋館だった。焦げ茶色のレンガ造りの外装をしており、二階正面の扇状に出っ張ったテラス部分以外は、全体的に直方体の形をしていた。そして主流となったコンクリートジャングルに逆行するその古めかしい外観からは、ある種の威圧感と荘厳さが滲み出ていた。

「これは凄いな」

「こちらはゼオン様が所有されていたお屋敷の一つです。今日から暫くの間、お二方にはこちらでお過ごしして頂きます」

「こんな立派な所に僕たちだけで？ なんだかもったいない気がするな」

「その心配は無用だ、ダニエル。ここには俺たち以外にも誰か泊っているようだ」

「え？」

ダニエルとゾフィーが揃って首をかしげる。ゴードンが無言で、屋敷正面の一角を指さす。そこには今ダニエルたちが乗っているのと同じ、黒いリムジンが停めてあった。

身長のはあるつかというドアを開け、大ホールに出る。そこは一階と二階をぶち抜いた吹き抜け構造になっており、真上には巨大

なシャンデリアがつり下がって煌々と明かりを灯していた。一階部分には左にドアが一つ、右にドアが二つ付いており、正面には二階に続く階段があり、二階部分はシャンデリアを囲い込むように、木材で足場が構成されていた。そして木板の上に赤い絨毯が敷き詰められた二階には、左右に一つずつのドアがあった。

その一階部分。階段前で待ち構えていた先客を見て、あり得ない物を見るような目つきでゾフィーが叫んだ。

「ダリア様！ジリー様！」

ゾフィーの声に反応し、赤いドレス姿の女性と黒いスーツ姿の男性がゆつくりとこちらに近づいてきた。女性の方は茶色の、ウェーブのかかったロングヘアを持ち、吊り上がった目や薄い唇から怜悯な印象を感じさせた。化粧気は無く、目尻や口元にはいくつか皺が刻まれていた。男性は栗色のふわりとしたショートヘアで、女性とは対照的に顔つきは柔和で、まだ若さが見えた。

「キャプテン・スクリーム様に、マックス・キッド様ですね？私はゼオン・H・トレイルの妻の、ダリアと申します。今回は私どものご要望に答えていただき、誠にありがとうございます。大したものはありませんが、解決までの間、どうぞこちらでくつろいでいただきますい」

ダニエルたちの二歩前で立ち止まり、ダリアと言った女性にこやかにそう言つて深々と頭を下げる。するとゾフィーが彼らの間に割つて入り、怒り半分、困惑半分でダリアの方を向いて言った。

「あの、ダリア様？」

「あらゾフィー。どうしたのかしら？」

「どうしたのではありません！なぜこのような所にいらしたのですか！」

「夫の遺産を狙う連中を片づけてくれるヒーローたちの姿が見たくなつてここに来たのよ。何か問題あるかしら？」

「大ありですよ！」

ゾフィーの後を引き継ぐように、ダニエルが一步前に出て言った。

「この屋敷に盗聴器が仕掛けられていないとは考えられません。もし奴らが僕たちの存在に気づいて奇襲をかけてきたら、どうするつもりですか？」

「ご安心ください。自分の身くらい、自分で守れますわ」

「いや、そう言う問題では……」

「五月蠅いぞマックス・キッド」

ゴードンが胸ポケットから取り出したサングラスをかけながら、きっぱりと言いつつ放った。

「そうなる前に俺たちが向こうに出向けばいいだけだ。それで終わる」

「簡単に言うな。じゃあ聞くが、連中が今夜にでも襲ってきたらどうするつもりなんだ？」

「俺たちがこいつらを守ればそれでいい。お前もそれでいいな？」

そう言つてゴードンがゾフィーの方を向く。その迫力に圧されて、ゾフィーが力なく頷く。そしてそれを見たダリアが両手を叩いて嬉しそうに言った。

「それは頼もしいですわ！ 私達も極力気をつけますので、もしもの時は宜しく願いますわ」

「ああ」

無関心に言い放つて、ゴードンが一人で左側のドアの方へ歩き出した。

「おい、どこに行く気だよ？」

「この屋敷の間取りを確認してくる。襲われた時に道に迷ったんじや話にならん」

「なら、地図はいりませんか？ 今手元に持っているのですが」

黒スーツの男　ジリーが純粹な好意からそう言つて、スーツの内ポケットから長方形の紙片を取り出す。ゴードンは立ち止つて後ろを振り返り、いらん、と言つてドアの向こうに消えていった。

「すいません。ゴードン　キャプテン・スクリームは、単独行動が専門なんですよ」

すぐさまダニエルがジリーに対してフォローを入れる。対するジリーも怒り一つ見せず、涼やかな顔でダニエルに言った。

「いえ、こちらこそ、要らぬお節介を焼いてしまったようで。まったく思慮が足りず申し訳ない」

「そんなことありませんよ。悪いのはあいつの方なんですから」

「ジリー、客人に気を使わせてどうするのです」

ジリーの横で、ダリアが目細めて咎めるように言った。その人さえ殺しかねない眼光の鋭さにダニエルが一瞬すみあがっていると、その様子に気づいたダリアがすぐに表情をほぐして言った。

「ああ申し訳ありません。お客様の前でこの様な姿を見せてしまって　ゾフィー、マックス・キッド様の屋敷の中をご案内して差し上げて」

その言葉に、ゾフィーが恭しく礼をしてダニエルの前に立つ。その顔は既にメイドとして仕事をする女のそれだった。

「ではマックス・キッド様。この屋敷の中をご案内しますので、私の後について来て下さい」

「あ、ああ。うん。宜しく頼むよ」

その仕草や雰囲気の変化に戸惑いながら、ダニエルがゾフィーの後について行く。そして彼女の誘導に従って右側手前のドアを開く時、ダニエルの脳裏にはあの時のダリアの目がはつきりと焼き付いていた。

## 第二話 屋敷と人殺し？

木製のドアをくぐると、そこはただっ広い食堂のようだった。壁にはいくつもの大小様々な絵画が飾られ、左側には四角い窓が規則的に並んでいた。向こう側の壁には巨大な柱時計が、おもりを左右に揺らしながら時間を刻んでいた。

中央には白いテーブルクロスを引いた長方形型のテーブルを囲うように、何十という木製の椅子が置かれていた。酒場に置かれているような安物ではない。中身の詰まった木材だけを切り出して何重にもニスを塗り込んで光沢を出した、重さと堅さを持ち合わせた逸品だ。

ダニエルは「僕には座れない」などとのたまうだろう。俺はそう思いながら食堂の右側を歩いていった。

テーブルと壁の間を暫く歩いてみると、右側の壁の端に一つのドアを見つけた。躊躇いなく開けて中に入る。

そこはし字型の廊下になっていた。正面方向には右側にドアが一つ。右側方向には左にドアが二つと、奥の方に階段があった。

正面側のドアに向かいながら、俺は一つ舌打ちをした。一度通った場所をもう一度通るのは無駄骨だと思ったからだ。しかし調べない訳にもいかない。ゆっくりと廊下を歩き、例のドアの前に立つ。中から物音が聞こえてくる。誰かいるのか？

ドアノブに手をかけ、ゆっくりと回す。鍵はかかっている。一つ深呼吸をし、ゆっくりとドアを開ける。

そこは厨房の様だった。全面ステンレス張りで、中央に白銀の台が並び、それを取り囲むようにコンロや冷蔵庫があった。壁にはまな板がかかっている。包丁は上にあるケースの中に仕舞われていた。その部屋の向こう側。部屋の隅で、一人の男が椅子に座っているのを見つめる。長い髪をうなじの辺りで束ねてゴムで縛り、白いシヤツの上からノースリーブのスーツを身につけている。この屋敷の



執事だろうか。

手にはデッキブラシを持っており、それが何度も床に当たって、その度に軽い音を響かせていた。掃除していて寝ていたのか？

「おい」

俺がそう言うと、まるでバネ仕掛けの玩具のように椅子から飛び上がる。そして額から滝の汗を出しながら、激しく首を振って左右を見回していた。

「こつちだ」

「え？ええ……ああ」

俺が屋敷の人間ではないと知って、男があからさまに安堵のため息を漏らす。だが俺が近づいてくると、男は再び拳動不審になり始めた。

「な、なんだよ。ここは関係者以外立ち入り禁止だぞ」

「悪いな。間取りを確認しに来た」

俺の声と容姿にビビったのか、若干体を後ずさりさせながら男が言った。

「間取り？あんた誰だ？」

「キャプテン・スクリーム。対岸の街でヒーローをしている」

「俺はジョナサンだ。わざわざ対岸からこつちに来たってのか？ご苦労なことだ。それで、何しに来たんだよ？」

「この屋敷には依頼を受けて来た。ゼオン・H・トレイルの遺産を狙う連中を残らず叩き潰してほしいと言われてな」

「ゼオン様の？」

そう言うなり、ジョナサンは顎に手を当てて考え込む。だがそれも一瞬で、すぐに顔を上げておどけるように俺に言った。

「おいおい、ゼオン様の遺産を狙うやつなんて、ここにはいないぜ。この家には何年も使ってるが、奥様も息子様も、家族仲はすこぶる良かったからな」

「お前たちはどうなんだ？執事やメイド連中は？」

「それこそないな。こう言っちゃなんだが、俺たちの忠誠心はそんなにそこらの下僕連中とは訳が違うからな」

怪しいもんだ。俺がそう思っていると、ジョナサンが続け様に言った。

「わかった。あんたさてはここを根城にして、その遺産を狙おうとする奴らのアジトを探し出そうとしてるんだな？」

どうだと言わんばかりに俺の方を見てくる。ジョナサンの勘の良さに内心驚きながら、俺はこの部屋を後にしようとした。ここがどういう部屋なのか判明した今、長居する理由も無いからだ。

しかし、俺が部屋を出ようとする、ジョナサンが俺を引きとめるように言ってきた。

「お、おいおい。もう行っちゃまうのか？せめてアクションくらい返しても」

「まだやることがある」

「なんだよ、つれねえなあ。せっかくだからもう少し話していこうぜ」

「断る」

「俺はダリア様の命とはいえ、こんな辺鄙なところに連れてこられてうんざりしてるんだよ。他のメイドやら執事やらの数も少ないから話し相手もないし、暇つぶしになる物もありゃしない。書棚にある本だって」

そこで突如ジョナサンが言葉を切り、してやったりな笑みを浮かべながら俺に言ってきた。

「なああんた、書棚で思い出したんだが、こんな話を知ってるか？」

「なんだ？」

「人切りアッシュの伝説さ」

## 第二話 屋敷と人殺し？

「人切りアツシュ？」

同じ頃、ゾフィーとダニエルはホール右側のドアの一つを越えた先にある巨大な書庫に居た。

そこはこの屋敷一階の右側三分の一を完全に占有しているかのようだった。壁一面に書棚が置かれ、中央の空間にも壁にあるのと同じ大きさの書棚が等間隔で並べられていた。書棚が置かれたところ以外の床には赤い絨毯が敷かれ、書棚の手前には長テーブルとイスが置かれている。奥の左隅には二階に上がる階段と、男女別々に別れたお手洗いがあった。

そしてダニエル達の左側には、壁で仕切られ真ん中をくりぬかれた司書の詰め所が見えた。どうやらホール右の奥側にあるドアはあそこに通じているようだ。

そんな中でダニエルが先に上げた声を上げたのは、そこにある大量の書物を眺める中で、不意にゾフィーがその名を口に出したからだった。

「はい、聞いたことはございませんか？」

興味深げにゾフィーが尋ねる。初めて聞くフレーズの意味が分からず、客が狼狽する様を期待するかのような口ぶりだった。だがそんな彼女の狙いは簡単に打ち崩された。

「ああ、アツシュのことなら聞いたことがありますよ」

「まあ、そうなんですか？」

ダニエルの自信ありげな言葉にゾフィーがわずかに肩を落とす。それを見て内心してやったりなダニエルが、壁にびっしり埋め込まれた書物に目を移しながら言った。

「確か、対岸にあった街に古くから伝わる殺人鬼の話、でしたよね？」

「ええ。私はあの街　アルヒタウンの出身なので、向こう側から

来た何も知らない人にこの話をするのが、楽しみの一つなんです。試すようなことをしてごめんなさい」

河を挟んだ二つの街は、仲が悪い訳ではなかったが、かといって交流が盛んな訳でもなかった。互いの住民は交易で会う以外は特に相手を意識することも無く、相手に興味を持つことも無く今まで生活をしてきたのだった。故に向こう側の情報も滅多に来ることが無く、相手方の歴史や文化は何も理解されていなかった。当のダニエルでさえ、対岸の街の名前がアルヒタウンだということすら知らなかった。

そうなった原因を両者の間に跨る河によって交流が遮られていたからだとする学者もいたが、詳しいことはわからなかった。

そんな状況だから、今のゾフィーのように血生臭い伝説を対岸の人間に話して震え上がらせ、それを見て喜ぶ者もいるのだらう。純粹な悪戯心だ。ダニエルはそんな彼女を怒る気にはならなかった。

「いえ、お気になさらず。実を言うと、僕はここに来る前に一度その話を聞いてるんですよ」

「まあ、そうだったんですか？一体どちらで？」

「フェリーの上で、船頭から聞きました」

ゾフィーがあっ、という顔を見せる。それを見て面白がっている自分がいる。だからダニエルは彼女を怒れなかった。

「確かその船頭から聞いた話は、こんな感じでしたね」

視線を上に向けながら、ダニエルがつい数十分前のことを思い出した。

## 第二話 屋敷と人殺し？

「お客さん、人切りアッシュって、知ってますかい？」

フェリーの吹きっ晒しの操舵室で、舵を握っていた初老の男は始めにそう切り出した。顔が隠れるほどの白い眉毛と口髭をはやし、その髭の動きで口元に笑みを浮かべているのが辛うじてわかった。この時ゾフィーとゴードンはそれぞれの個室に引っ込んでいた。

「いや、聞いたことないな」

「でしょうなあ」

ダニエルがそう言うと、男はますます笑みを強くした。その意地の悪い笑顔を見せたまま、男が言った。

「いや、実はアタシは『向こう側』の街の出身でしてね。貿易とか物々交換とかであつちの港に行く、あんたみたいな『そっち側』の人に、『向こう側』に伝わるこの話をよくするんですよ」

「へえ」

「聞いてみたいですかい？」

「向こうに着くまで暇だし、聞いてみるかな」

そうダニエルが言うと、待つてましたと言わんばかりに男が声を低めて話し始めた。

「これはそう、今より何百年も前の話でさあ。あの街にアッシュって言う、一人の男がいたんです」

「アッシュ？」

「そう、オドネル・アッシュ。こっちじゃあ知らない奴はいないサ  
イコ野郎ですよ」

男が吐き捨てるように言った。ダニエルが言った。

「サイコって、どういう人だったんですか？」

「やってることは映画とかドラマとかで見る連続殺人なんですけどね。こう、普通じゃないんだ。正気じゃない」

「連続殺人だって普通じゃないですよ」

「あんたの言う普通じゃないんですよ。確かにそう言うことやる奴は頭のネジが外れてるかも知れんが、オドネルはもうレベルが違った」

「どういう意味です」

ダニエルの問いに、思わせぶりに男が答えた。

「こんな話があります。ある日、オドネルが道を歩いていた。持ってる手提げ袋にはパンやら林檎やらが入ってた。おおかた、市場で明日の飯の分を買った帰りなんでしょう。

不意に奴は、横に見えたカフェの屋外席でコーヒーを飲んでた一人の女性に声をかけた。その人は二十代半ば。その時通りやカフェには、他に人はいなかった。当然二人に面識なんてない、赤の他人です。

オドネルはその女性に近づいて、こう言った。『やあお嬢さん。こんにちは』。女性も苦笑してそれに応えた。『あらやだお嬢さんだなんて。お口が上手なのね』。それを見て、オドネルも『おつと失礼。お嬢様』とか言つて、二人揃って笑い声をあげた。それだけなら若者のただのナンパとして終わっていたでしょうね。でもこれにはオチがある」

「……」

「『今日も美しいですね』、オドネルがそう言つて笑いながら、缺で女の首を刎ねたんです」

「……え？」

カートウーンのギャグマンガのページをめくつたら、そこにいきなり劇画調のスプラッターなシーンが広がっているような、何を言っているのか意味がわからない違和感を感じた。

展開が唐突過ぎる。とにかく意味がわからない。

理解出来ずにダニエルがポカンとしてしていると、それを見ながら男がしてやつたりな笑みを浮かべた。

「い、いや、意味がわからないです。突然過ぎるでしょう？」

「そうでしょう。あなたにはあたしが嘘八百並べてるようにしか聞

こえないでしょうな。でもこれ、全部事実なんです」

「事実って……」

「後にオドネルは一回逮捕されるんですが、その時に彼を鑑定した医師はこんなことを言ってるんです。『奴は人間が息をするかのように、殆ど意識しないで当然のように殺人という行爲を行っている。奴にとって殺人とは生理現象そのものである』、とね。その後奴は『プライバシーの侵害だ！』と叫びながら看守を殺して脱獄しています」

「いや、そんな、まさか……」

まるで信じていないダニエルを見ながら、それも予測通りだと言わんばかりに男が慣れた口調で言った。

「嘘だと思っんなら、ご自分で調べてみちやいかがです？ 街の図書館だとか、でかい本屋とかにはそういうことの書かれた本が普通にありますから」

## 第二話 屋敷と人殺し？

「みたいなことを言われましてね。流石に嘘でしょう？」

フェリーでの話を喋り終わり、最後にゾフィーに同意を求める。だがゾフィーは答えることなく、書棚の一つに向かってそこから一冊の本を取り出してきた。

「それは？」

「それに対する答えです」

分厚い本をテーブルに置き、ゾフィーがおもむろにページを繰り始める。そしてある所で手繰るのを止め、その部分を開いてダニエルを呼んだ。

「ダニエル様。少しよろしいでしょうか？」

「ああ、なんだい？」

ダニエルが早足で歩き、ゾフィーのすぐ横に立つ。ゾフィーがその本をダニエルに向けて見せながら言った。

「これはいわゆる、スクラップブックです。ここの部分を読んでみてください」

ゾフィーの指示した所を読み進めていく内に、ダニエルの顔が目に見えて青ざめていった。

### 真昼の惨劇

民間人八人死傷

八歳の少年、出血多量で死亡

警察官五名殉職。

オドネルは逃走後、再び消息不明

鉄による傷跡。無残な手口

「ハロー」フレンドリーに笑いかけながら犯行……目撃者語る  
「どうして逃げるんだい？」今にも泣きそうなオドネルの声。

泣きたいのこっちだ



オドネル・アッシュの凶行、今週で八度目

「これは……」

記事と一緒に挟まっている写真を見て、ダニエルが思わず後ずさる。大人も子供も、男も女も、あらゆる人種の間が、糸の切れた人間の様に大通りに散乱していた。手足をあらぬ方向にひん曲げ、地面を真っ赤に濡らしながら。

八度目？これを、何度も？

隣で、ゾフィーが静かに言った。

「これがオドネル・アッシュ、人切りのアッシュの伝説です」

「冗談だろう？」

人切りアッシュの『伝説』を聞いたゴードンが貶すように言う。  
当のジョナサンは目は笑っていたが、語り口は真剣だった。

「いやいや、これが冗談じゃないんだ。当時の新聞で、奴の話題が出なかったことは一度もなかったんだ。でなきゃ、何百年も前の殺人犯なんざ誰も覚えてないっての」

「警察は仕事をしたのか？」

「勿論したさ。でも敵わなかったんだ、これが。何人がかり、何十人がかりで抑え込もうとしても、オドネルの野郎は服についたごみを払うようにそいつらを吹っ飛ばしたらしいぜ」

「奴のアジトは？搜索したのか？」

「徒労に終わったんだとさ。アルヒタウンはもちろん、その北にある森や南の平野も風潰しに探したらしいが、なにも無かった」

ゴードンが顎に手を当てて考え込む。ジョナサンが続ける。

「奴はいつもふらっと街に現れて、街の人間と談笑しながら、普通に買い物をしていくんだ。他と違うのは、その時に会話相手をいきなりメッタ刺しにすることくらいだな」

「……」

何と言うやつだ。今まで見たことのない悪だ。

「流石にそんなことが何度も起きると、街の人間の方も警戒して奴

には近づかなくなった。買い物もさせなかった。するとオドネルは、自分を見るなり悲鳴を上げて遠ざかっていく連中を見てこう言っただけだ。『どうしてみんな俺を避けていくんだ！』ってな」

「凄まじい神経をしている」

「ただのイカレ野郎だよ。あいつの中では息をしたり飯を食ったりするのと人を殺すのは同じくらい当然のこととして認識されている、って当時の学者が言っていたような気がするな」

「良く知っているな」

素直にゴードンが感心すると、ジョナサンが恥ずかしげに内ポケットに手を入れ、一冊の本を取り出した。

「それはなんだ」

「い、いや、オドネル・アッシュの偉業……犯行をまとめた本だよ」  
「なに？」

「俺、あいつのファンなんだ……」

そう言いながら頭をかくジョナサンを見て、ゴードンの目の色が変わった。

貴様は悪に与するのか。

### 第三話 襲撃、反撃、オーバーキル？

ダニエルは街の中にいた。

雲一つない空の上で太陽が燦々と輝き、自分の今いる街を明るく照らしていた。

その街は自分の住んでいる街とは大分趣が異なっていた。辺りに点在するのは高層ビルではなく煉瓦造りの小振りな建物ばかりであり、開けた所が多い分、そこはメルドビツヒよりもずっと開放的だった。

中央の通りに車はおらず、そこを古めかしい原色の服を着た人々が悠々と歩いていった。制服を着た学生やスーツ姿のサラリーマンもいたが、誰も焦っているようには見えなかった。

ダニエルはその街にある一軒のカフェの、その外に置かれたテーブル席の一つにいた。

手元にあるコーヒーを飲みながら、ダニエルは何の気なしに辺りを見回した。すると遠くの方から、一つの人影が見えた。それは迷いのない足取りで、大通りをまっすぐ歩いてきた。

男はそのカフェの前で足を止め、ゆっくりとこちらを向く。手に手提げ袋を持ち、中にはパンやリンゴなどの食べ物を入れている。真上から照りつける日光のせいかなその顔は真っ暗で、人相は良く見えなかった。

ダニエルの視線が、その真っ暗な男の顔に固定される。

そして男はダニエルの方ではなく、その左に居た一人の女性の所に向かっていった。

「やあお嬢さん、こんにちは」

男が女性に語りかける。ダニエルがそちらの方を向く。女性が苦笑しながらそれに答える。

「あらやだお嬢さんだなんて、お口が上手なのね」

男と女が揃って笑い声を上げる。ダニエルの動悸が激しくなる。

ダメだ。逃げる。

「今日も美しいですね」  
逃げる。

鮮血。悲鳴。真っ赤な。首から真っ赤な。

「逃げる！」

「はっ」

飛び跳ねるように顔を上げたダニエルの視界に広がったのは、長い廊下をぼんやりと照らす、規則的に壁に並んだランプの橙の光だった。

書庫でゾフィーとの話を終えたダニエルは、その後二階の案内を受けた。二階部分は大まかにいえば大ホールを挟んで左が個室、右が丸ごと男女別の共同浴場になっていた。浴場は全面黒い石張りで、自宅の風呂よりもずっと広がった。

個室部分は縦に走る廊下を中心に正確に八等分されており、中は一人で寝るにはちょうど良い広さだった。二階部分のドアはから伸びる通路は、丁字を描くようにその縦に走る廊下と垂直に交わっていた。だが高級ホテルのスイートルームのようなバカでかい部屋を想像していたダニエルにとっては、その部屋の狭さはかなりショックだった。

途中、大ホールに出た所で、反対側のドアから出てきたゴードンと出くわした。右手が赤かったが敢えて何も言わなかった。

その後ダニエルたちは、一階の食堂で夕食を頂いた。ダリアやジョーリーも一緒だった。ゾフィーは厨房に引っ込んでいたのか、姿を見せなかった。

そして夜。風呂からあがって来たダニエルとゴードンは、ゼオンの残された家族に口を揃えてこう言った。

「夜の間、我々があなた方をガードする」

護衛もつけず、この二人はお忍びでやってきたのだ。だからといって、不用心な彼らに迫る危険を黙って見過ごすわけにもいかない。

入浴中に彼らは話し合つてそうすることに決めた。そこにはヒーローとしての矜持もあった。

そう言う訳で、ダニエルとゴードンは用意された部屋には行かず、各々決めた護衛対象の個室の前に立つて見張りをする事になり、今に至る。

どうやら見張りの最中に立つたまま眠りこけてしまったらしい。

目を擦りながら、ダニエルがわが身の失態を恥じる。ちなみにダニエルは今、ダリアの部屋の前に立っていた。

それにしても、あんな夢を見るとは。

先程見た夢の内容を思い出し、ダニエルが身を震わせる。本来夢とは覚醒してすぐにその内容を忘れてしまう物らしいが、ああも鮮烈なものを見せつけられては、忘れるほうが無理と言う物であった。なぜあんな内容の夢だったのか？答えは明白だった。

「ゾフィーめ」

スクラップブックに載っていた記事と一枚の写真。地獄のようなその光景を振り払おうと頭を揺らし、同時にそれを見せた張本人の名前を恨めしげに呟く。正確にはフェリーの男も共犯だったが、彼のことはダニエルの脳内からはきっぱり忘れ去られていた。

階下でドアを叩く音が聞こえてきたのは、ダニエルがそんなことを考えていた時だった。

力任せに握り拳を振りおろし、ドアに打ち付ける音。

だん。

だんだん。

だんだんだん。

その音は段階的に回数を増し、段々と暴力的な響きを強めながら今も続いていた。だが完全に覚醒し脳をフル稼働させていたダニエルは、それを聞いてほくそ笑んでいた。

「これはいったい、何の音でしょうか？」

流石に気付いたのか、寝間着姿のダリアがドアを開けてダニエルに尋ねて来た。不安を煽らないよう、ダニエルが柔和な笑みを浮か

べて言った。

「ご安心ください。あれはブラフです」

「ブラフ？」

「恐らく本命は別の所から来る。ダリアさん」

「はい」

ダニエルがダリアを見据える。

「僕に作戦があります。僕の言うとおりにしてください」

「わかりました」

彼女の顔はまるで恐怖していなかった。

### 第三話 襲撃、反撃、オーバーキル？

その男は、屋敷の外、正面玄関を下に見て左の位置にいた。

全身を黒いボディースーツで包み、顔にはフルフェイスのマスク。腰にホルスターを提げ、束ねた縄を肩に背負っていた。縄の先端には鉤がついていた。

正面玄関からは未だに音が響いていた。全て作戦通りだ。男はほくそ笑んだ。こうして正面に注意をそらせ、側面から本命が忍び込んでターゲットを仕留める。簡単な仕事だ。

男が担いでいた縄をほどいて、鉤のついた部分より後ろを右手に持つ。そして姿勢を反らし、振りあげた右手をカウボーイ宜しく振り回す。

縄が手から離れる。目標の部屋の窓に鉤が引つ掛かる。一瞬音がしたが、玄関前の騒音に比べれば雀の涙だった。

男は慣れた動きでその縄を伝い、目的の部屋に音も無く侵入する。一応力ギ開けの道具は持ってきていたが、上向きに開く窓に鍵がかかっていなかったのは幸運だった。

男が中に入って辺りを見回す。左にクローゼット。奥に扉。右隅に便所に通じる扉。右手前にベッド。

男は迷わずベッドに近づく。全身を白い毛布にくるんで顔は見えなかったが、そ膨らみから中に誰かがいることは明白だった。ホルスターから、刃渡り五センチほどのナイフを引きぬく。

あばよ。心の中でそう呟き、ナイフを振りおろす。

刹那、視界が真っ白になる。

「！」

視界だけでない。正面から飛び上がった何かが体にまとわりつき、その嵩張りと重量で体の自由が利かなくなる。男はパニックになり、体を滅茶苦茶に振り動かして得体の知れないそれを格闘した。

「雑魚が」

地獄のように冷たい声が聞こえて来たのは、男が自分の戦っている相手が毛布だとわかった時だった。

頭蓋がへこまんとするほどの鋭い衝撃。頭の中に閃光が走る。視界が白から黒に変わっていくのが、男の見た最後の景色だった。



### 第三話 襲撃、反撃、オーバーキル？

「出てこい」

仕事を終え、毛布にくるまったまま倒れている男を担ぎあげながらゴードンが言った。するとクローゼットの戸が開き、中からジリーがのそりと現れて来た。

「お、終わったんでしょか？」

「ああ」

不安げに尋ねるジリーにそうぞんざいに答えた後、ゴードンがドアを開けて廊下に出る。すると向こうでも獲物がかかったのか、ダニエルが自分と同じように丸めた毛布を担ぎながら部屋から出てくるのが見えた。

「ダニエル」

「ゴードン、そっちは 聞くまでも無いか」

ダニエルが気付き、こちらを見ると同時に状況を理解する。そしてこちらにゆっくり近づきながら、ダニエルが感心したように言った。

「まさか、君の言った通りに上手く行くとはな。びつくりだよ」

『敵』がこの屋敷に何らかのアクションを起こした場合、ジリーとダリアをクローゼットに押し込め自分たちが代わりにベッドの中に潜り込む。そして『敵』がその個室に侵入した場合、その時の状況に応じて行動する。これが先程ゴードンのとった、非常時における撃退作戦だった。恐らくダニエルも同様の方法で『敵』を撃退したのだろう。

因みにこれは入浴中にゴードンが発案したものである。

「この程度、造作も無い」

だが当の本人はそれを自慢するでもなく、ただ事実を淡々と述べただけだった。

「それにベッドに入っただ後は全てアドリブだ。俺の功績ではない」

「謙遜するなよ。こうして実際に二人を守ることが出来たんだ。万々歳だ」

そうダニエルが囁し立てていると、階下から鳴り響いていた暴音がぴたりとやんだ。それと同時に、ダリアとドリーが恐る恐る部屋の中から姿を見せた。

「もう、帰ったのでしょうか？」ドリーが躊躇いがちに、だが顔色一つ変えずに言った。

「おそらくは。襲撃が失敗したのに気づいたんでしょう」ダニエルがそれに応える。

「なんにせよ、これで一段落と言ったところでしょうか」

「まだだ。根本的な解決にはなっていない」

そう言って胸をなでおろしたダリアを、ゴードンが一蹴する。そしてダニエルもゴードンの意見に賛同した。

「ええ。今回のような襲撃が一日で終わるとは思えない。それに一度失敗に終わったことでむしろ、連中は次回からはもっと多くの戦力を動員してくるでしょう」

「もしくは搦め手で攻めてくるか、だ。物量でもそうだが、毒ガスなんぞ持ちこまれたら対処しようがない」

「では、どうなさるおつもりですか？」

ヒーロー二人のつきつけた事実に対し、だがジリーが動揺の色を見せずに尋ねた。ゴードンが返す。

「決まっている。先制攻撃だ」

「先制攻撃？」

「奴らのアジトを俺たちが襲撃し、先に連中を叩き潰す。やられる前にやれ、だ」

「そうだね。それに奴らの正体とか目的とか、色々聞きたいこともあるし」

「それはあのバッシュとか言う男から聞き出せばいいだろう」

「だからそのアジトに向かうんじゃないか。言いだしたのは君だろう？」

そう言い合いながらホールに続くドアに向かい出した二人を引きとめるようにダリアが言った。

「あの、どちらへ？」

「言ったはずだ。アジトに向かう」

「ですが、そのアジトの場所をご存じなんですか？」

「そのためのこいつらだ」

そう言ってゴードンが、自分の担いでいた毛布を顎で指す。

「何のために生かしたと思っている」

#### 第四話 襲撃、反撃、オーバーキル？

それから数時間後、ゴードンとダニエルは捕えた襲撃犯から吐かせた情報をもとに、敵の本拠地に向けて借り物のリムジンを走らせていた。ダニエルは白いスーツを、ゴードンはトレンチコートにサングラスを身につけ、二人は既にヒーローとして生まれ変わっていた。

襲撃してきた男が言うには、アジトは港町にある倉庫の一つの地下を利用していらしい。この際、尋問はゴードンが行ったが、彼は一体何をしたのか。後部座席でグロッキー状態になっている二人の男をバックミラー越しに見ながらダニエルはそう思ったが、知らぬが華と考え直して何も聞かなかった。

「ダニエル」

不意に、助手席に座ったゴードンがダニエルに話しかけた。ダニエルが前を見つめたまま答える。

「なんだい？」

「お前は不審に思わなかったか？」

「なんのことだい？」

「襲撃を受けた時のことだ」

腕を組み直し、ゴードンが続ける。

「あの時、最初から最後まで、俺たちの前にメイド連中が現れることはなかった。ダリアやジリーの前にもだ。普通なら連中は真っ先に主の所に駆け込むものだろう」

「屋敷とは別の宿舎で休んでいたから、気がつかなかったんじゃないか？」

「あそこに来る途中で、そんなものが見えたか？」

ダニエルが左手で顎をさすりながら数時間前の光景を思い出した。そして暫く黙った後、苦そうに口を開く。

「そう言えばなかったな。じゃあどこに？」

「あの屋敷を調べている途中で、階段を見つけた。地下に続く階段だ」

「彼らはそこにいたってことか。ならそれでいいじゃないか」

「なら尚更だ。なぜ奴らは出てこなかった？」

「地下深くにいて気付かなかったとか」

そのダニエルの言葉にも納得していないのか、うなり声をあげながらゴードンが考え込む。

苦い顔をしながらダニエルが尋ねる。

「何を考えてるんだ？」

「親玉はバツシユではなく、屋敷の連中かもしれない」

「連中？」

「あの時消えていた奴らだ」

「バカな」

ダニエルが一蹴する。

「ダニエル、君はまさか、メイドや執事が一丸となつて、ダリアさん達に反旗を翻したと思っているのか？バツシユはその一部ではないと？」

「もっと酷いかもしれないがな」

「なんだって？」

ゴードンの言葉にダニエルが首をかしげる。ゴードンはそれを無視して、誰に言うでもなく呟いた。

「まあ、直接聞けばわかる」

目的地の倉庫は、それ自体は緩やかな弧を描いた屋根を持った何の変哲もないものだった。周りを見渡せば、同じような形をした倉庫が何十と林立していた。木を隠すなら森の中とはよく言ったものだ。

抵抗なく開いた鉄製のドアの向こうには、何百何千という木箱が山積みになっていた。その中身は魚の缶詰だった。

「こつちだ」

ゴードンに促され、身長以上に積まれた木箱の山の中を、その隙間を縫うようにして進んでいく。そして左奥隅まで来た時、ゴードンがそこで腰をおろし、コンクリートの床を手でさすり始める。

するとある一点でゴードンが手の動きを止め、親指と人差し指で何かの端をつまむ。そして立ちあがりながらつまんだ方の手を勢いよく引くと、コンクリートと同じ色をしたシャツがめくれあがってそこからハッチの様なものが姿を現した。

「当たり前かな」

「たぶんな」

ハッチの凹んだ取っ手を掴み、力を入れて引き上げる。重苦しい音を上げながら開いたハッチの先には、暗黒とそこに繋がる鉄製のハシゴがついていた。

「準備はいいな？」

ゴードンがサングラスの中央に指を当てながら言う。帽子の位置を整えながらダニエルが返す。

「もちろんさ。行こう」

それを聞いたゴードンが闇の中へ真つすぐ飛び降りていった。

#### 第四話 襲撃、反撃、オーバーキル？

闇。

そこには闇が広がっていた。

照明も無く、人気も無い。何の音も聞こえてこない。その空間に果てがあるのかさえわからない。

無限の闇。

時折どこからともなく吹きつけるうすら寒い風が、どこかに通じる道があることを辛うじて伝えていた。

ドリーは、その窮極の孤独の領域に、たった一人で置き去りにされていた。

両手足を縄で縛られ、椅子に固定された状態で。

ヒーロー二人が出て行ってから数分後、彼は今の状況に立たされていた。

「……」

その発狂しかねない状況の中で更に極限状態に立たされていた彼は、顔を強張らせて口を固く結び、じっと闇のある一点を見つめていた。これから来る未曾有の恐怖に押し潰されないよう、必死に耐えていた。

遠くの方から乾いた足音が聞こえてくる。その音は段々と音量を増し、こちらに近づいてくるのがわかった。ジリーはそちらの方を見向きもしなかった。

やがてジリーの真横に、一人のメイド服姿の女が現れた。顔にそばかすを残し、髪は三つ編み。右手には銀色の盆を持っていた。

盆の上には注射器が置いてあった。

「……」

ジリーは顔色一つ変えない。それを見ようとすらしない。汗を流すことも怯え震えることも無く、じっと闇の中を見据えていた。

「お覚悟は、よろしいですね？」

女が左手で注射器を持ちながら静かに言った。  
ジリーは小さく頷いた。  
首筋に異物感。  
後戻りはできなかった。



#### 第四話 襲撃、反撃、オーバーキル？

やはり地下は寒い。

ただっ広く薄暗いコンクリート張りの空間。その中で、ダニエルは白い息を吐きながらそう思った。そして目の前に文字通り山のようにつず高く積まれた黒服の男たちを見つめながら、帽子を整えて一つため息をついた。

彼らはアルヒタウンでも指折りのマフィアグループだった。そして数分前まで、彼らは医者が見たら満点をつけるほどの健康体だった。鍛え抜かれた頑強な体と冷徹で狡猾な頭脳。それらを武器に、彼らはここを根城にして様々な悪事に手を染めて来たのだった。

だが数分前、何の前触れも無く表れた二人の自称ヒーローによって、彼らはその体を粉々に破壊され、一人残らず全滅してしまったのだった。

「いてえ……いてえよ……」

「骨が折れちまってんだ……助けてくれ……」

「駄目だ。そうやってもう少し反省している」

マフィアの懇願を一蹴しながら、ダニエルが床に落ちていたデザートイーグルを拾い上げる。非常に大きく、重い。そして一般人が撃つたら肩を脱臼する。少なくとも護身用に持つようなものではなかった。

このマフィア連中は、やはりというか、ほぼ全員が拳銃を持っていた。ダニエル達がここに来た時、彼らはテーブルを囲んで会議中だった。だがその中には先程ダニエルが拾ったものやドラムマガジン式のグレネードランチャー、対戦車ライフルといった物騒極まりないものを担ぎながら発言している者もいた。

そして二人の姿を見た時、彼らは話し合いもせずにそれらを構えて一斉掃射を敢行した。

「誰だ、あいつら！」

「誰だつて構わねえ、ここを見た奴は生かして返すな！」

普通の人間ならそれだけでお陀仏だろう。だがマフィアの相手は普通の人間ではなかった。

彼らはまさか、遠くから歩いてくる男が銃弾より早く動けることなど思いもしなかっただろう。彼らが引き金を引いた時、既にその懐には白いタキシード姿の男とコート姿の男が潜り込んでいた。その時の彼我の距離は七十メートル。

「え？」

「Hi！」

弾丸がコンクリートを穿つ爆発音と、自身の骨がへし折れる鈍い音を同時に聞いたのは、後にも先にも彼らだけだろう。この予想外の奇襲に、彼らはあつという間に総崩れになった。密集しているのも災いし、大半の人間は銃を撃つことすらできなかった。

「ダンスパーティだ」

「真面目にやれ、ダニエル」

その中を、キャプテン・スクリームとマックス・キッドは縦横無尽に駆け巡った。のろのろと蠢くマフィアの中を、彼らはエッジを利かせた踊りを踊るかのように鋭く、瀟洒に動き回った。そして目に付いた悪党共を、まさに疾風の如く、片っ端から成敗していった。剣のように鋭利に。手刀が腹を突き、相手を背後の壁に叩きつける。

鞭のようにしなやかに。回し蹴りが頬を打ち、敵をその場で回転させる。

ハンマーのように激烈に。拳が悪の鳩尾を捉え、そのまま真上に打ち上げる。

一人の悪党が空を飛び、その余波で数十人の悪党が全方位に吹き飛ばされる。

それはまさにエンターテイメント。二人のヒーローを中心にした、テレビドラマのワンシーンのような過激で華麗な殺陣だった。

#### 第四話 襲撃、反撃、オーバーキル？

そして数分後、今に至る。

しかしマフィアの山の向こうからは、依然として打撲音と悲鳴が聞こえてきた。

「言え。お前たちは何をしてきた」

「し、知るかよ」

「死ね」

肉の潰れる音。人のものとは思えない金切り声。

ゴードンが『尋問』を行っていたのだった。実際、山を作っている連中の怪我の八割は、あの男の尋問によるものだった。

悪は許さない。あの男の信念が発露したのだ。

と、向こう側から一人の男が山なりに飛んできた。そして山の一部に激突して動かなくなり、自らがその山を形成する一部となる。

再び悲鳴と鈍い音が聞こえ始めて来た。

「ゴードン、あまりやりすぎないでくれよ」

ダニエルが怯えるように、山越しにいるゴードンを咎める。するとそれまで聞こえていた打撲音が途絶え、代わりに背骨を氷柱に差し替えられたかのような怖気を感じさせる声でゴードンが返してきた。

「一度に全てを吐かないこいつらが悪い」打撃音。

「こっちはメルドビツヒとは訳が違うんだ。いつもの調子でやっていると本当に捕まるかもしれないんだぞ？」打撃音。

「それがどうした」打撃音。うめき声。

「人殺しをしたらシャレにならないって言ってるんだ。いや、それも十分まずいが」打撃音。二回連続。

「殺しはしない」

何かの千切れる音。絶叫。

「一応」

打撃音。

「殴るのをやめてくれ！」

ダニエルが叫ぶ。

「おいゴードン、いい加減にしてくれよ。正義の鉄槌を振るうのはいいが、それを差し引いても無闇に人を殺すのは良くないんだぞいや、普通に考えて殺人は駄目だよな。差し引くとか無闇とか、ああいや、何を言ってるんだ僕は」

まるで殺人を擁護するかのように言っている自分に気付き、ダニエルが頭を抱える。ゴードンと一緒にいると、自分まで道徳的観念を投げ出してしまいそうになる。ダニエルはゴードンと共に行動する時、いつもそう考えていた。

それでも彼がゴードンと共に動いているのは、彼が自分の友人であると自覚しているからだ。友情は理屈や危機意識では切れないものなのだ。

「……ダニエル」

「な、なんだい？」

不意にゴードンが話しかける。

「確かに意味のない殺人、大量殺人は悪だ。それは俺がやったとしても悪であることに変わりはない」

「あ、ああ」

「そうだ。殺人は悪だ。済まないダニエル。余計な心配をかけさせてしまった」

そしてゴードンもまた、自分が友人であるダニエルに精神的負担をかけていることに少なからず負い目を感じていた。

「ある程度人は殺さない。誓おう」

「あ、ああ、そうか。嬉しいよ」

そう言つてダニエルが小さく笑う。なんだかんだでこの二人は仲が良かった。前にも同じやりとりをして同じセリフを聞いた気がするが、ダニエルは気にしないことにした。

その時、山の向こうから助けを請うような細かい声が聞こえてき

た。

「わ、わかった。全部話す。全部話すよ」

それを聞いたダニエルが胸をなでおろす。その男に対して、ゴードンが低い声で脅すように言った。

「俺の質問に答えてもらうぞ」

「あ、ああ。話すよ。話す」

「今から数時間前にある屋敷が襲撃された。そいつらは正面玄関を叩いて気を反らし、側面から襲う手段を取った。心当たりはあるか？」

「あ、ああ。それは俺たちだ。俺たちがやった方法だ」

意外とあっさり吐いた。それほどまでにゴードンが恐ろしいのか当然か。目の前の半死人の山を見ながらダニエルが思った。

「お前たちに襲うように指示したのはバッシュという男か？」ゴードンが続ける。

「ああ、そうだ」

「奴は今どこに居る？」

「……」

「おい」

「む、向こうだ！向こう側の街だ！」

「……なんだって？」

「どういう意味だ？」

「どういうって、言葉どおりの意味だよ。あいつは今対岸の街に出張ってて、こっちはいないんだよ」

「おいおい……」

予想外の答えに、ダニエルが信じられないと言わんばかりに苦い顔をする。

「もう少しまともな嘘をついたらどうなんだ？」

しかしゴードンは、表面上は欠片も動揺を見せずに尋問を続けた。

「なぜ奴は向こうに行った。理由は知っているか？」

「あ、ああ。そもそものはあいつがいきなり対岸に渡るって言いだし

たんだ。屋敷に襲撃をかける数週間前さ。当然俺達も疑問に思っ  
て、何でそうするのかみんなで聞いただしたんだ」

「なんて言った？」

「戦力を集める。ヒーローを味方につける、って」

「ヒーローだと？」

俺たちを探していた？

その予想の斜め上に行く回答はゴードンも想像だにしていなかつ  
たようだ。不意に横つ面をひっぱたかれたかのように、短く呻く。

しかしそれを自分に対する怒りと勘違いしたのか、言いだした本  
人は半ベソをかきながら喚くように懇願した。

「本当だって！信じてくれよ！バツシュの野郎、もつと戦力をかき  
集めなきゃアツシュの連中には勝てないとか言ってたんだよ！こ  
うでもしなきゃあの屋敷の連中は殺せないって！本当なんだって！」

「……だそうだが、どう思う」

「どう思っつて……」

男の言葉を聞いたゴードンの問いかけに、ダニエルが露骨に顔を  
しかめる。

到底信じる気にはならなかった。

#### 第四話 襲撃、反撃、オーバーキル？

キースがただ一人でパーシーの家を訪ねたのは、ゴードンたちがマフィアのアジトを襲った数時間前だった。その姿はいつもの水色の制服ではなく、代わりに茶色のトレンチコートを身にまとっていた。

ドアの前に立ち、躊躇いがちにインターホンを押そうとする。しかし指がボタンに触れる直前、目の前のドアが唐突に内側から開き、そこからショートヘアの女性が涙をこらえるように顔を伏せながら飛び出してきた。キースは反射的に横によけたが、女性はそれを無視し、肩を震わせながら足早に立ち去っていった。

「おや？誰かと思えばキース刑事ではないか」

キースがその背中をじっと見つめていると、ドアの向こう、だだっ広い居間に居座りカップを手にしたパーシーが声を上げた。キースはそれに軽く会釈すると同時にずかずかと中に入り、のんびり茶を飲んでいるパーシーに尋ねた。

「さっきの女は誰だ？」

「ああ、彼女かい？僕を頼ってやって来た迷える子羊さ。彼女は困っていたんだ。はたしてこの世界は存在する価値があるのかとね。そしてそれを考えている内に居てもたつてもいられなくなって、僕の託宣を聞きに来たという訳さ」

「お前は宗教でも立ち上げるつもりか？」

「まさか、僕は人助けをするだけだよ。善行は積んだ数だけ、来世で授かる祝福が増えるからね」

こともなげにそう言って、パーシーがポットを手にとって中身をカップに注ぐ。キースの分は無かった。だがキースはそれを咎めること無く、目の前の男がなぜこうも『信仰』を集めているのか、気になって仕方なかった。

この目の前に居る男は、この街の一部の人間からカルト的な人気

を誇っていた。年柄年中叫びまわっている支離滅裂な文言に感化されたのかはわからなかったが、彼を師匠ないし偉大な者として畏怖し、尊敬する者たちが確かにこの街に存在していた。

今見た女もその類だろう。そしてパーシーは、そうやって自分勝手に救いを求めて駆けこんできた彼らをつき返すことはせず、彼らの悩みに耳を傾け、あまつさえ自らそれらを解決しようと動くことさえあったのだった。

「ところで、君はどうしてここに来たのかい？……ああそうか、君も僕の啓示を受けにきたのだな！」

「ちげえよボケ」

得意げに言い放つパーシーの言葉を一蹴して、胸の内ポケットから手帳を取り出す。それをおもむろに開きながらキースが続けた。

「単刀直入に言うぞ。昨日、ここにヒーロー二人がいなかったか？」

「ああ、いたぞ。それがどうしたというのだ？」

「やつぱりか」

「一人で納得してないで僕にも詳しいことを説明したまえ！何の分け前もなしにベラベラしゃべった僕がバカみたいじゃないか！」

「ただの事情聴取だったのに何言ってやがる。出ねえもんは出ねえんだよ。我慢しろ」

「いやだ！」

子供のようにダダをこねるパーシーに対し、キースは自分が折れることを選択した。バカとまともに付き合っても時間の無駄だ。キースが内ポケットから一枚の写真を取り出してパーシーに投げ渡した。

「なんだこれは？」

「見りゃわかる」

パーシーが写真を凝視する。そこには彼の良く知る二人の男の名前が記された紙片が写されていた。紙片は端が真っ赤に塗れていた。「ダニエルにゴードンの名前があるじゃないか。これがどうしたんだ？」



「大分前に一人の男の死体が見つかった。その紙をポケットにしま  
いこみながらな。身許確認も済んでる」

「借金取りか？」

「話は最後まで聞け」

キースがそう言うつてはやるパーシーを抑える。ついさっきまで話  
すのを嫌がっていたことは、彼の中からはさっぱり消えていた。

「名前はバツシュ・ウッド。向こう側の街に構えるトレイル家の所  
で執事をやっていたらしい。トレイルつてのは、あの、大企業のト  
レイル・グループの元締め」

「バツシュだつて？」

その死者の名前を聞いた時、パーシーが表情を険しくした。

「バツシュ、バツシュ。そういえば昨日騒いでたな」

「死因は鉄で心臓を一突き。即死だったそうだ……おい、聞いて  
るか？」

キースはそんなパーシーの態度には気付かずに、まだ世間に公表  
されていない事件の概要説明を終えた。極秘事項だった

自分の失態にも気付いていなかった。

## 第五話 ビヨンドザソード ？

アジトから屋敷への帰り道。半殺しにしたマフィア連中を街の警察に引き渡した二人のヒーローの心は、だが晴れやかとはほど遠いものだった。

バツシュの戦力は全て潰した。後はバツシュを捕まえるだけだ。それで終わる。

本当に？

捕まえて終わりなのか？

ダニエルは苦い顔を浮かべながら、説明できない後味の悪さを噛み締めていた。何かが引つかかる。ヒーローとしての、いや、事前に危険を察知する生物としての直感が告げていた。ではそれは何なのか？それを理論的に説明できないからこそ、彼はその苦みを嫌というほど感じていたのだった。

黒幕は本当にバツシュなのか？

「考えるのは止める」

不意にゴードンが切り出す。動揺を感じさせない氷点下の口調に、ダニエルは今までにない安心感を覚えた。

「止める、というのはどういうことだい？」

「言葉どおりだ。情報が少なすぎるこの段階で、納得できる回答など見込めるはずもない」

「ああ……ああ、確かにそうだな。じゃあどうする？向こうに戻って、バツシュを捕まえるか？」

「それも手の一つだ。だが」

ゴードンがサングラス越しに、前方に見えたトレイルの屋敷の姿を捉える。

「奴らに事情を聞いてみるのもいいかもしれないな」

その闇夜に照らされた姿は、二人の心象を現すかのように、暗く陰鬱に映っていた。

闇。一步先すらも見えない闇。画用紙に黒ペンキをぶちまけたような、情け容赦のない完全な闇。

その漆黒の闇の中で、ランタンの火が鬼火のように揺らめいていた。しかしその火は周囲の闇に比べてあまりに貧弱であり、ランタンの真下に置かれた机の表面を照らすだけで精一杯だった。

そして机と共にそのランタンの光に照らされて、机の前に一つの人影が佇んでいた。だがその貧弱なその光ではその人間のおおまかな輪郭を捉えるのが限界であり、その身を覆う闇を振り払うことは出来なかった。

「……」

人影が、机の上に置かれていた物に手を伸ばす。光に照らされたそれは木枠で囲まれた一枚の写真だった。そこに映っている人間に視線を固め、じっと動かなくなる。

「……」

不意に上方から、大きな物音と悲鳴が聞こえてきた。それに呼応するかのように、石のように固まっていた人影が再び動き始める。写真を机に置き、ランタンの火を消す。

完全を取り戻した闇の中で、甲高く乾いた靴音だけが辺りに響いていた。

## 第五話 ビヨンドザソード ？

「……」

落ちるような浮遊感と衝撃で視界が真っ黒になった後、最初に意識を取り戻したのはパーシーだった。

そこはコンクリートで覆われた薄暗い空間だった。どこか湿っぽく、少し息が詰まった。中はそれほど広い訳でもなく、上方の彼方に見える横長の長方形の穴からさす光が、その空間の端から端までを照らし出していた。

「……ふはははは、いやいやいや」

数分前の記憶を引き出し、辺りを見回して状況を理解したパーシーがゆっくりと立ち上る。そして痛む尻をさすりながら真上を見上げて愉快そうに言った。

「やられた！」

「感心してる場合じゃねえだろ。なんだよこれは」

そんなパーシーの隣で、目を覚ましたキースが尻餅をついたまま呻く。やがて億劫そうに立ちあがると、周りを見渡しながら首をかしげた。その様子を見て、パーシーが罵倒するように叫んだ。

「バカ者、見てわからんか？ 僕たちは落とし穴に嵌ってしまったのだ！」

そう言つてパーシーが上に見える穴を指さす。

「まったくなんということだ。しかしこれは流石に僕にも予期できなかったな。まさかホールに落とし穴が設置してあるなど、まったく誰が予想できただろうか！」

パーシーとキースがこの屋敷に辿りついたのは、ゴードンたちがこの屋敷に戻る数分前だった。バツシュの人柄やトレイル家との関係などを知りたかったキースは、ゾフィーがこの家を探ねてきた際に気絶していたふりをして二階から話を全て聞いていたパーシーの情報をもとにしてここまで来たのだった。

ホールの鍵は開いていた。そして中に入り込んだ二人がホールの中ごろまで進んだ時、突如二人の足元が下向きに左右に割れた。突然のことに何が起こったか把握することもできず、二人は闇の中へと真つ逆さまに落ちていったのだった。

「しかし今になって落とし穴とは。この発想はなかった。逆転の発想だな！」

「感心してる場合か　だがまあ、どうしてこんな物騒な物を作ったのかは気になるが……うん？」

上から黒板を爪で引つ搔いたような高くか細い音が聞こえてくるのに気付いたキースが、言葉を切つて視線を上に向ける。そしてそこに見えた光景に顔をひきつらせて戦慄した。

「やばい。やばいぞ」

「どうした？」

「上の穴が閉まってきてる！」

跳ねあげられるようにパーシーが首を上に向かう。床が元の位置に戻ろうと端をせり上げていき、光が外から内へと狭められていく。「帰り道が無くなっちまうぞ」

「そうでもないぞ。向こうに扉があるではないか！」

そう言つてパーシーが指さす方に、見るからに重そうな鉄製の扉があった。扉の上部には四角いガラス窓が嵌められており、そこからうつつすらと光が漏れ出していた。

「そして反対側にもう一つあるぞ！」

そして同じ作りをしたドアが、正反対の位置にもう一つあった。

「さてキース刑事、どちらに進む？」

「どっち行つたつて同じだ。とにかく進むぞ」

「いいだろう！神に抗う方法は立ち向かうことなのだ！」

キースとパーシーは最初に見た扉へ一直線に向かう。そして穴が閉まりきる直前、彼らは一息に扉を開け、その中に入り込んだ。

扉の向こうは通路だった。上部に斜めにつけられた照明板は眩しいほどに光を放っており、真つ白な床や壁や天井と相まって過剰な

までに清潔な印象を与えていた。さっきまでいた所とは違い、埃っぽさもカビ臭さも無かった。横幅は男二人が横並びに歩けるくらいの広さがあった。

目の前の環境の変化に二人が戸惑っていると、背後で床がその形を取り戻す重苦しい音と、扉のロックがひとりでにかかる軽い音が聞こえてきた。

「一方通行とは。落とし穴と連動しているのだろうか？」

「作った本人に聞けばわかるさ。行くぞ」

キースがそう言い放ち、意を決して前に進み始める。パーシーもその後ろに続き、歩きながら興味深げに辺りを見回していた。

## 第五話 ビヨンドザソード ？

通路は幾重にも曲がりくねった構造をしていた。

数メートル歩けばＴ字型の分岐に行きあたり、そこを曲がって少しすればまた別の分岐に出くわす。更に分岐点はどれも同じ色彩と形状をしていたため、自分が今どこを歩いているのか、進めば進むほどわからなくなっていくた。

「こつも同じ景色が続くんじゃ、頭が痛くなってくるな」

「区別をつける方法はあるぞ、キース刑事」

そう言つとパーシーが胸ポケットから油性ペンを取り出し、目の前の壁に数字と左向きの矢印を書き始めた。

「それは？」

「今から曲がる方向と、この曲がり角の番号を書いているのだ。こうすれば、どこを曲がったのかもあつという間に分かるだろう」

「中々頭が切れるな。でも曲がる方向くらい相談して決めてもいいんじゃないか？」

「僕は啓示を受けたのだよ、キース刑事。右に曲がれば破滅が待つだろう、さあ喜んで右に曲がるといいと、魔王ギンガスタからの魔の啓示を！ならば破滅の道とは逆の道を行けばいいのだ！」

「ああ、お前つて基本そう言う奴だよな。忘れてたよ」

パーシーのアイデアは功を奏し、それからさして迷うことも無く多くの分岐を捌いていった。そして暫く歩いた後、二人の前には一つの扉が見えた。最初に開けたものと同じつくりで、上部の窓枠は真つ黒で何も見えなかった。

「振り出しに戻った訳じゃないよな？」

「開けてみればわかる」

そう言つてパーシーがずかずかと歩きだし、水平につけられたレバーに手をかける。

「おい、少しくらい警戒した方が」

「善は急げだ！」  
パーシーが一息にドアを開けた。



## 第五話 ビヨンドザソード ?

床下に落とされ、嫌味なほど白い通路を通り、扉を開けた先に広がる光景を見て、ゴードンとダニエルは息をのんだ。

「これ、何だと思う?」

「世界地図。メルカトル図法だ」

正六角形状の広大な空間。内装は通路と同じように目眩がするほど真っ白で、足場は擂鉢のように、外から内へ下るように段差状になっていた。二人が開けた扉は段差の真ん中ほどに据え付けられていた。

段差の境目には柵が設けられ、いくつものランプやキーボード、ディスプレイのついた彼らの背丈ほどの機械が、壁や柵に張り付くように備わっていた。そして二人の正面にある壁を丸ごと使ったモニターに、縦横に線の引かれた世界地図が大きく映し出されていた。

「何なんだこの部屋は? 地理の勉強でもしてたのか?」

「広すぎる。スタジアムで勉強する奴はいない」

「ホームランをかませるほど広くは無いと思うな。ざっと見積もって、部屋の半径は六十メートルくらいか?」

「十分広い」

柵に手をかけて体重をかけながら、ゴードンが辺りを見回す。そして低いうなり声をあげながら、ゴードンがダニエルに言った。

「ダニエル、ひよつとしたら当たりかもしれないぞ」

「この屋敷の人たちが黒幕ってことかい? でもそれなら、どうして僕たちを呼んだんだ?」

「連中に聞けばわかる。それにバツシュの件も」

「素直に応じると思うかい?」

「やましがなければこの部屋やバツシュ、全て話すだろう。でなければ奴らは悪だ」

「やれやれ、手厳しいな」

不意に自分たちの反対側にあるドアが開き、中から渋みのある声が聞こえてきた。二人がとっさに身構えると、真っ白い通路を背景にして一人の執事らしき男が現れて来た。

黒いスーツを着こなし、その下には黒いネクタイと白いワイシャツを身につけているのが分かった。距離があるせいか顔の右半分をガーゼで覆っていたからか、その顔を見分けることはできなかった。

「誰だ？」

「おいおい、誰だとは御挨拶だな」

そう言つて男が肩をすくめる。後ろで束ねた黒髪が小刻みに揺れた。それを見たゴードンが目の色を変えた。

「お前、あの時の」

「思い出してくれたか？ヒーローさんよ。あん時はよくもまあ俺をぶつとばしてくれたな。おかげで顔にデカイ傷がついちまったよ」

大きく手を叩きながら男が愉快そうに言う。ゴードンが静かに男の名を呼んだ。

「ジョナサンか」

「知ってるのか？」

「屋敷を調べている時に会った。それだけだ」

「それだけ？おいおい、人様の顔殴つといてそれだけとは、随分じゃないのか？」

「それはお前が悪だったからだ。謝る気はない」

「ああ、そういうことか」

そう言つてダニエルが頭を抱える。そんなダニエルの苦悩をよそに、ジョナサンが意地の悪い笑みを浮かべながら言った。

「まあ、今となつちゃそんなことはどうでもいい。俺だって上の命令がなきゃ、わざわざこんな所に来る気なんかねえよ」

「腑に落ちん言い方だが、まあいい。お前たちの主に合わせる」

「合わせる？無理だね」

そう言いながら、不意にジョナサンが上着のボタンに手をかける。「悪いけど、あんたたちをこっから先には行かせない。まったくめ

んどくさい話だな」

ネクタイの結び目に指をかけ、窮屈そうに首を動かしながらそれを外してワイシャツ一枚になる。そして大きく肩と首を回しながらジョナサンが言った。

「ああ軽い……上の人間に命令されたんだよ。仕方ないだろ？『殺してでも奴らを通すな』ってな。無茶ぶりもいい所だぜ」

「随分物騒な命令じゃないか。しかしそんなに嫌なら、僕たちのことは無視してもいいんじゃないか？」

「そうもいかない」

体を回すのを止め、鋭い眼差しで二人をじっと見据えながらジョナサンが言った。

「俺のいる所は縦社会でな。上の命令には絶対服従なんだよ」

「執事やらメイドやらにも上下関係と言うのは存在するのかい？」

「ああ、滅茶苦茶厳しいんだぜ？」

「俺たち二人相手に、一人で足止め出来ると思っているのか？」

ゴードンの言葉に、笑みを消して静かにジョナサンが返す。

「出来るからここに居る」

不意にダニエルは頬に風を感じた。生ぬるい、血の匂いの混じった風。反射的に左に顔を向ける。

ジョナサンの拳をどてっ腹に食らい、弓なりに吹っ飛ばされようとしているゴードンの姿がそこにあった。

## 第五話 ビヨンドザソード ？

この仕事を続けていると、命の危険に晒されることも一度や二度ではない。頭をバールで殴られたり、拳銃で体に風穴を開けられたり、コンクリートの足枷を嵌められて海に突き落とされたり。飛び出してきた車に跳ね飛ばされたりもした。

「……」

そして今自分が感じている苦痛は、おそらく五年ほど前に感じた、車に轢かれた時の物に似ているかもしれない。背中から壁にのめり込みながら、キースはそう考えた。そしてそう結論付けると同時に、彼は今まで感じたことの無い戦慄を覚えた。それは体を動かす度に全身に走る痛みのもせいでもないし、次第にぼやけてくる視界のせいでもない。

「……」

モザイクがかった視界に一つの人影が映る。漫画で見るような、青いメイド服姿の女性だった。キースの肩を殴った右手が真っ赤に濡れている。その赤が、つい数分前に起きた事象を、彼の脳裏に漫画のコマのように断片的に想起させた。

開いた扉の先は六角形の部屋。方々に訳のわからない機械が置かれている。

反対側の扉に立っていたのは、目の前にいるぼやけたメイド。

「通さない」とメイド。「そこをどけ」とキース　　が言いきる前に、メイドはキースの眼前に飛び込んでいた。何が起きたか理解する前に、キースの左肩にメイドのパンチが食い込む。パンチ。

そう、ただのパンチ。しかしそれを食らったキースの体は、あの時と同じように真後ろに派手に吹き飛ばされていった……。

そして意識が今に至る。同時にキースは、己の抱いている恐怖の

根源を改めて知った。

「お前」

掠れる声でキースが呟く。

「お前、人間なのか……？」

車に轢かれたのと同じ衝撃を、自分と同じ人間が繰り出してきた。その非常識さが、彼にとつては何よりの恐怖だった。

「なんなんだよ。お前のそれ」

「あなたが知る必要はありません」

キースの問いかけを無視して、メイドが一步一步距離を詰めてくる。ゆつくりと、瀕死の獲物を前にした猛獣のように焦らず、だが油断を見せずに確実に近づいてくる。

やがてメイドがうずくまるキースの前に立つ。右手で手刀を作り、真っ直ぐ心臓に狙いを定めて大きく後ろに引き絞る。

「失敬」

メイドが静かに死刑宣告を告げる。引き絞られた右手が、杭打ち機のように心臓めがけて突撃してくる。

指先が左胸に触れる。キースの頭の中が真っ白になる。

瞬間。横から飛び込んできたパーシーがメイドの横腹にドロップキックをぶちかます。キースの目の前で、メイドの体が大きく真横に吹き飛ばされていった。

「バカめ、二体一だと言うのを忘れたのか！」

斜めの壁に叩きつけられたメイドに対してパーシーが得意げに言い放ち、そしてキースの方を向いて大声で言った。

「大丈夫か？折れるにはまだ早いぞ」

「折れるだって？ちよつとびっくりしただけだ」

左肩を右手で押さえ、ふらつきながらキースが立ちあがる。対するメイドの方は自らの肩を軽くはたき、表情を崩さず何事も無かったかのように立ちあがった。

「しかしなんなんだよあいつは。あの馬鹿力はないだろ」

「パワーを引き出すだけならば簡単だ。筋力増強剤を定期的に投与

するなり、外科手術で筋肉や骨格をいじくり回せばいいのだからな」  
「やけに詳しいな」

「酒の席で酔ったゴードンから色々聞いたのだ。奴め、僕の金で自分の体をいじくりまわしていたのだからな！」

「あいつが？」

「まあそんなことはどうでもいい。むしろ気になるのは奴の顔だな」  
パーシーの素っ頓狂な言葉にキースが声を上げようとすると、不意にパーシーがキースの体を突き飛ばす。尻餅をついたキースが抗議の声を上げようとした瞬間、件のメイドがさっきまで自分たちっていた場所めがけて拳を振りおろそうとしている姿が見えた。そしてメイドは思わず前かがみになり、空振った拳が床を捉え、派手な音を立てながらその床をへこませる。

「……！」

「逃げるのだ、キース刑事！」

「なに！？」

メイドがゆつくりと立ち上がる。その向こう側からパーシーの叫び声が聞こえる。

「彼女には説得は無駄だ！彼女は色々と欠けている！」

「どういう意味だ！おい！」

「知りたければ生きることだ！いずれ来る神の破滅の火を見るまで、君もまだ死にたくはなからう！」

メイドとキースの目が合う。メイドの目は酷く虚ろで、人形の目に嵌めこまれたガラス玉と目を合わせているようだった。

背筋が凍る思いがした。

「急ぐのだ、急げ！」

そんなキースの考えなどお構いなしに、しきりにパーシーが叫びたてる。しかしそれによって我を取り戻したキースが、負けじと声を張り上げた。目は合わせたままだった。

「お前はどつするんだ！」

「僕はこいつの相手をする。なあに、僕だってそれなりに鍛えてあ

るからね、心配はいらない！」

「馬鹿野郎、警察が民間人を置いて俺だけ逃げられるかよ」

「警察だから戦おうなどという考えは捨てたまえ。これはもう君個人で解決できる問題ではないのだ！」

「お前なら出来るってのか？」

メイドが立ちあがり、真っ直ぐキースの方を向く。視線を下にそらし、両手を伸ばして再び狙いをつける。

「出来る！」

背後からパーシーが殴りかかり、それを察知したメイドが全身で振り返ってその拳を受け止める。ガラス玉と目を合わせ、パーシーがニヤリと笑う。

「出来るさ」

自分の拳を受け止めたメイドの腕をもう一方の腕で掴み、背中をメイドの正面に合わせるように体を回転させて密着させる。それに合わせて掴まれた方の腕も拳を振りほどいて両手で腕を掴み、上半身を前に傾かせて目一杯両手を前方向に引き下げる。

メイドが弧を描くように宙を舞った。背中から無防備に床に叩きつけられ、派手な音を立てながらその場で大きくバウンドする。その強烈な一本背負いに対し、メイドは大口を開けて一瞬苦悶の表情を浮かべた。

「さあ、今のうちだ！」

相手の腕を両手で握ったまま、パーシーが叫ぶ。

「君は足手まといなのだ。下がりたまえ！」

「……くそ！」

目の前のパーシーとメイドをまたいで、キースが一息に反対側のドアに急ぐ。片方の肩が潰されている自分は、確かに足手まとい以外の何物でも無かったからだ。

## 第五話 ビヨンドザソード ？

弓なりに吹き飛ばされ、大の字に壁に叩きつけられたゴードンを待っていたのは、更なる拳の応酬だった。

背中と壁が接地し、前方向に大きくバウンドする。その直後、元いた場所に残像を残すほどの速さで眼前に迫ったジョナサンが、その無防備な腹に乱打を浴びせて来たのだった。

「H A H A H A H A H A H A H A H A H A !」

幾重にも残像を残していく何百発もの拳が、ゴードンの身体を着地させることなく壁に釘付けにさせる。背後の壁が軋み始め、ゴードンの周囲にヒビを走らせていく。

「!」

「おいおい、どうした？ああ!？」

「……!」

「痛すぎてぐうの音もでねえってか？しっかりしてくれよ。こんなワンサイドゲームじゃ面白くも何ともないぜ!」

サデイスティックな表情を浮かべながら、ジョナサンが攻撃のスピードと密度を上げていく。

それはまさに機関銃。銃弾の速さと砲丸の重さを持った拳がゼロ距離で炸裂させる破壊力は、その一撃ごとにゴードンの内臓を抉り、意識を刈って行った。

「……」

一方、ダニエルは腕を組みながら、それを黙って見ていた。背を向けている格好のジョナサンにも、壁に礫にされているゴードンにも、自ら手を加えようとはしなかった。

そしてジョナサンはダニエルが襲ってこないことを気配で察知し、顔を嗜虐的に歪ませて心配するような口調で殴り続けながらゴードンに語りかけた。

「おい、お前の相方に助けってくれって頼んでみたらどうなんだよ？



ひよつとしたら助けて来てくれるかもしれないぜ？」

「……！」

「まあ、当のあいつは動く気ゼロに見えるけどなあ。だってそうじゃないってんなら、とつくに俺のことは止めてる筈だぜ？そうだろう？」

「……！！……！」

「土壇場で裏切られるたあ運がねえな。友達くらいまともに選べよなあ？まあ、あいつがまともな奴だったとしても、この状況じゃまともに言葉も出せねえけどな！H A H A H A H A H A H A！」

口と目を大きく開き、狂ったようにジョナサンが笑う。するとそれに反応してか、ゴードンの口が僅かに動いた。ジョナサンが攻撃を中止し、だが右腕を腹に食い込ませたまま聞き耳を立てる。荒い呼吸を繰り返しながら、ゴードンが振り絞るように言った。

「……け」

「お？なんだ？命乞いか？それともダメもとで頼んでみるかあ？」

「止めておけ。目には目をだ」

「……意味がわかんねえなあ……一言で言え！」

「死ね」

ジョナサンの中で、何かが切れる音がした。

「クソがア！」

前よりも早い密度とスピードで、ジョナサンが攻撃を再開する。

容赦のない拳の弾幕とその生み出す衝撃の前に、ゴードンはもはや呼吸さえも困難になっていた。そしてその衝撃はまた、ボタンで前を留めていた白いスーツをティッシュのようにちぎり飛ばしていき、やがて六つに割れているが青アザだらけの腹筋を露わにさせて行った。それを見たジョナサンは、ダメ出しとばかりに右腕を大きく腰だめに構えた。

「終わりだ、死になア！」

最後の一撃が、ゴードンの腹を下から抉るように深々と突き刺さる。

インパクト。

低くくぐもった爆音を響かせ、そこから更に衝撃波を、床に散乱しているそれまで壁だった破片と共に辺りに撒き散らした。

暫くして余波が完全に消え去る。それと同時にゴードンの体から力が抜けていき、糸の切れた人形のようにがっくりと肩と首を落としました。

こいつはもう終わりだ。

ジョナサンが悟った。

## 第五話 ビヨンドザソード ？

「随分薄情なんだな」

腹に食い込ませている右腕にかかる重みが急激に増していくのを感じながら、ジョナサンが首だけ振りかえらせてダニエルに言った。ゴードンはピクリとも動かない。

だがダニエルは挑発まがいのセリフを受けても、飛んできた破片が全身に当たっても、自身のポーズを崩すことはなかった。友人の惨状を前にしても顔色一つ変えずに、ダニエルがジョナサンに言った。「まあ、巻き添えを食うのはごめんだからね」

「お前本当にヒーローかよ？お友達の命より自分の方が大切だったのか？」

腕を解き、肩をすくめながらダニエルが言い返す。

「ああ、まあ、加勢したいのは山々なんだが、その」

「言い訳たあ見苦しいぜ。素直に俺が怖いって言えばいいじゃねえか。スツキリするぜ？」

「話は最後まで聞けって」

自分の台詞に割って入るジョナサンを制しながら、ダニエルが腰に手を当てて言った。

「僕だって加勢したいさ。本当さ。仲間のピンチは助けたい。でも、そのさ」

不意に手首を圧迫されるような鈍い痛みを感じ、ジョナサンが顔をしかめた。

「途中で横槍いれて、巻き添え食らいたくないからね」

背後で砂利がこぼれ落ちる音。危険を感じ向き直ったジョナサンの細首を、ゴードンが右手で締め上げる。

「ッ！」

「……」

「……が……え……？」

死んだ男の手が、鉤爪のように喉に食い込む。ジョナサンは発声はおろか、満足に呼吸も出来なかった。やがて腹からジョナサンの腕が離れ、ゴードンが両足で着地する。反対に今度は、ジョナサンが首に食い込む右腕一本で持ち上げられた格好になっていた。予想外の出来事に、ジョナサンはまともな思考が出来なくなっていた。

「目には目をだ」

ゴードンが絶対零度の戦慄を与える語調で静かに言い放つ。そして右手を大きく振りかぶり、口を開きかけたジョナサンの頭を頭頂部から壁に激突させた。咄嗟にダニエルが腕で目を覆う。

鬱憤を晴らすように、何度も何度もぶち当てる。悲鳴が衝撃音でかき消される。

「……あいつの攻撃、容赦ないから」

苦々しげにダニエルが呟く。それを聞いたゴードンが、右手に持った物体を引きずりながら冷ややかに言った。

「無駄だ。奴はもう終わりだ。何も聞こえん」

「殺したのか？」

「まさか」

ジョナサンの顔は頭頂部から流れる血で真っ赤になっていた。その首を掴んで持ち上げながら、ゴードンがジョナサンにも聞こえるように言った。

「こいつにはまだまだ使い道がある」

## 第五話 ビヨンドザソード ？

屈辱だった。

数十分前、上部の命を受けて侵入者の排除のためにこの部屋に来たデイクシー・バーンズは、今はこれ以上ないほどに屈辱を味わっていた。

最初に侵入者二人を見た時、デイクシーは自慢のポーカーフェイスを崩さぬままに、楽勝だと内心でほくそ笑んだ。実際片方は大したことなかった。この調子ではもう片方もすぐに終わる。そう思っていた。

しかしそれから数十分後、デイクシーの制服は擦り切れ、自慢の身体は打ちのめされ生傷だらけ、何より関節の節々が悲鳴を上げていた。そして自分をそんな目にあわせた目の前の男 パーシーとが言った奴は、傷一つなく文字どおりピンピンしていた。

「さあどうしたんだね？随分ヘトヘトではないか？」

曲げた腕を頭の高さにまで上げた構えを取り、パーシーが得意げに挑発してくる。

どうしてこうなった？口の端の血を拭いながら、デイクシーは鉄面皮の下で必死に思考を働かせた。いや、理由は分かっていた。つい先ほどの交戦を思い返しながら、閉じた口の奥で歯を食いしばった。

デイクシーが飛びかかる。頂点から高度を落としながら、ぐんぐんと距離を詰める。

間合いに入ると同時に、デイクシーが側頭部めがけて右足を蹴りあげる。バネ仕掛けのように勢いよく飛び出したその一撃は大気を裂き、切っ先がぶれて見えるほどのスピードでパーシーの頭めがけて牙を向く。

だが足の甲と側頭部が当たる瞬間、パーシーは上半身をほんのわ

ずか後ろに反らして、その攻撃を紙一重でかわしたのだった。靴の先が鼻の頭をかすめ、目標を失った足が虚しく空を切る、のならまだ良かった。

だがパーシーは靴と鼻が擦れる瞬間、両手でデイクシーの足を掴み、なんとその状態で半回転してからデイクシーを投げ飛ばしたのだ。一連の動作が速すぎて、受け身などとれるはずもない。

結果、自分の技の勢いにパーシーの回転のエネルギーもプラスした状態で無防備に床に叩きつけられたデイクシーが一方的にダメージを負うことになり、攻撃を食らうはずだったパーシーは傷一つ負っていないかった。

そう。奴に自分の攻撃が通じないのだ。こちらがどれだけ速く動いても、どれだけ素早い攻撃を繰り出しても、さっきのように男はそれに平然と反応し、あらゆる攻撃を全て紙一重でかわしていたのだ。

そして空振った腕や足に、奴はまるでタコのように自分の手を絡ませてきた。そして掴んだ腕を引き寄せて投げ飛ばしたり、体重を支えているもう片方の足を払って派手に転倒させてマウントポジションを取り、関節技を掛けてきたりもした。後ろに回って肩や腰を小突き、転ばせるだけの時も。

自分からは全く動かず、相手の行動を利用して制する。この自分を手玉に取るようなパーシーの戦術に、それができるだけのパーシーのスキルに、デイクシーは言いようも無いほどの屈辱と怒りの炎を燃え上がらせていた。

「ふふん、大分怒っているな。僕にはわかる。顔は能面のように筋肉一つ動かしてないが、中ではメラメラと火が猛っている！」

自分の核心を突く発言を、パーシーが声を張り上げて言っただけ。その鋭さ、もしくは当てずっぽうが、デイクシーの火に油を注ぐ結果となっていた。

「なぜわかるのかだって？僕にはスペロスベルトの猛々しきグルソ

「より培った観察眼と、なによりこのしなやかで強靱な肉体があるのだ。君だってバカじゃないんだ。何が言いたいのかわかるね？」

相手に言い聞かせるようにパーシー淡淡と告げる。その態度や意味不明な言葉の全てが、デイクシーの神経を逆なでし苛立ちを募らせていった。

「……攻め手を変える必要があるようですね」

「ほらそれ。それだよ。自分の中じゃ怒り狂ってるってのに、そうやって外見では冷静を貫こうとする。それがいけないのだ。そんなんじゃない」

そしてそんなデイクシーの抑えようのない怒りをその目の奥から感じとったパーシーが、トドメとばかりにニヤリと笑って言った。

「君では僕には勝てないよ」

デイクシーの理性の糸が切れた。へこむほどの勢いで床を蹴り、一足飛びで瞬時にパーシーの眼前に肉迫する。気配が、一泊遅れて風がパーシーに降りかかる。

パーシーと目が合う。腕を組み、見えていると言わんばかりに余裕の笑みを浮かべている。しかしデイクシーはそのまま攻撃しろと言う己の激情を抑え込んだ。

デイクシーは更にそこで左足で床を蹴り、その反動を生かしてパーシーの右側面に回り込んだのだった。予想外の行動に、横からパーシーが息を呑むのが見えた。

「死ね！」

ここにきて、初めてデイクシーが声を荒げた。横に弧を描くように、後頭部めがけて右拳を振るう。

ギリギリで食いついたパーシーが、顔と拳の間に右手をねじ込む。直撃する一歩手前で、パーシーがデイクシーの拳を掴む。だがデイクシーは諦めなかった。

間髪いれずに、今度は左拳を相手の側頭部めがけて振りおろした。それもパーシーには見えていたが、反応するのが一瞬遅れていた。パーシーの左腕は動かなかった。

## 第五話 ビヨンドザソード ？

直撃。

頭から血を流しながらパーシーが後ろに倒れ込む。これで終わらせるつもりはない。

デイクシーがパーシーの真横につき、無防備なその頭を鷲掴みにする。そして自身の全体重をその腕にかけ、怒りのままにパーシーの頭を持ったまま床に叩きつける。

パーシーが大の字で床の上に組み伏せられる。さらにデイクシーは頭を握る手に力を込め、その頭を握り潰そうとした。常人ならば出来ないだろうが、自分なら出来る。あの選定試験を乗り越えたデイクシーは確信していた。

しかも一息には殺さない。少しずつ力を加えていき、ゆっくりと破壊してやる。いつ頭が割れるかわからない恐怖を心行くまで味わうがいい。鉄面皮は崩さず、しかし嗜虐心を露わにしながらデイクシーがパーシーの頭を締めつけていった。

「ふ、ふふふふ」

不意に笑みがこぼれる。しかしそれはデイクシーではなく、パーシーがこぼしたものだっただ。

「……何を笑っているのです？」

「ふふふ、いやなに、自分の勝利を確信して少し笑みがこぼれただけだよ。メイド君」

意味がわからなかった。パーシーの生殺与奪は明らかにこちらが握っているというのに。状況を理解していないのか？デイクシーが内心抱いた疑問に答えるように、パーシーが言った。

「わからないのかね？二対一だ」

「二対一？」

「君は僕を倒したと思っているようだが、君の敵はもう一人いるのだぞ？少しは周囲に気を配りたまえ」



その勝ち誇ったようなパーシーの口調がデイクシーをますます苛立たせた。頭を握る手に力を込めながら、デイクシーがパーシーに対して言い放つ。その言葉は

「何をばかな。あの人は逃げたではないですか」

「逃げたと思うだろう？でも違うのだ。あいつは逃げない男なのだ。僕にはわかる。なぜなら」

パーシーの言葉を遮るように甲高い銃声が部屋に響き渡り、それと同時に見えない手で押し出されたように、デイクシーが勢いよく横に吹き飛ぶ。

デイクシーは床にあおむけに転がり、そのまま糸の切れた人形のように、目を開いたまま動かなくなった。

起き上ったパーシーが周りを見回すと、キースがついさっき自分が出ていった扉に寄り掛かりながら右手で銃を構えていた。

「よう、大丈夫か？」

「おお、キース刑事」

「悪いな。連れを捨てて逃げるなんざ、俺の男としてのプライドが許さねえんだ」

そう言つて右腕を下ろして銃をホルスターに挿し、代わりに尻ポケットにあるタバコに手を伸ばして口にくわえる。

「安心しな。殺しちやいねえよ。ところで、火持つてねえか？」

そう言つて平静を装うとするキースに対して、パーシーが両腕を広げながら声高に叫んだ。

「なんてことをするのだ！台詞は最後まで言わせてくれ！」

「あのままだったらお前死んでたぜ」

「それは感謝している、ありがとう！だが台詞は言わせてくれ！それと火は持っていない！」

一気にまくし立てるパーシーを見て、キースは肩よりも頭の痛みが激しくなってきたことに気付いた。

## 第六話 LD ?

「ゾフィーがない？」女の声。

「は。我々も方々探したのですが、どこにも……」男の声。

「……困りましたね」

「いかなさいます？」

「放っておくわけにもいきません。彼女を探し出して、見つけ次第拘束して」

「しかし、どこにいるのか皆目見当も……」

「それなら目星は付いています。私の指示した場所を中心に、重点的に探してきて下さい」

「わかりました 行くぞ」遠ざかる足音。

「……」

ゆつくりと近づく足音。

「……厄介なことになったね」若い男の声。

「ええ、本当にね」

「彼らも防衛線を突破して来ているみたい。このままだと」

「心配はいらないわ。むしろ好都合よ……それより、準備をなさい」

「歓迎の準備？」

ガシャリ。レバーを下げる音。

車庫のシャッターが上がるような重苦しい音。

「ええ。LDの最終テストよ」

## 第六話 LD ?

丁字路を左折した先、まぶしいほどに漂白された通路の向こうから、銃弾が雨あられと降りかかってくる。通路の長さは今いる位置からおよそ百七十メートル、高さは四メートル、横幅は大の男三人分。その奥には二メートルほどの大きさの鉛色の自動ドア。そしてドアの前には執事五人とメイド三人。メイドは二丁拳銃、執事は突撃銃を持ち、容赦なく引き金を引いてくる。

ジョナサンを潰した俺たちは、その後通路を通る度に執事やメイド連中の攻撃に出くわした。その通路の出口を守るかのようにそれぞれが方陣を組み銃を構え、俺たちに対して執拗に攻撃を繰り返してきたのだった。

「くそ、これじゃ近づきようがない」

丁字路中央の左折側の角に隠れながら、俺の前で背を屈めているダニエルが毒づく。ダニエルの後ろには気を失ったジョナサンがくずおれていた。この男には最短ルートを通って目的地に着くよう言い聞かせておいたが、今になって考えると頼らなかった方が良かったかもしれないとも思い始めていた。

「ああもドカドカ力撃たれたら、いくらなんでも前に進めないぞ」

「このまま弾切れを待つか？」

「それもいいかもな。いや、そんなことしたらさっきのあいつみたいな奴が出てきたりするのか？」

銃弾が壁や床を抉り、硬質な音を辺りに響かせる。しかし俺の言葉に対してそう返し首をひねったダニエルからは、この状況をまるで問題にしていらないように見えた。

「随分余裕だな」

「あの程度の雑魚に後れを取るような僕じゃないさ」

「だったら速く行け。次はお前の番だ」

そこで通路の向こうから投げ込まれた手榴弾が反対側のドアにぶ

つまり、派手な爆音と煙を撒き散らす。その巻き添えを食らい軽く咳き込みながらも、ダニエルは己のペースを崩さなかった。

「ええ？やだよ」

「ガキの様な声を出すな。弾丸より速く動けばいいだけだろう。出来る筈だ」

「面倒なんだよ。すごい神経使うし、疲れるし」

「いい加減にしろダニエル。速く行って来い」

「何で僕が行くこと前提になってるんだ？おかしいだろ」

「おい」

「それより君が行けばいいじゃないか。悪は許さないんだろ？」

この野郎。サングラスの向こうからダニエルを睨みつける。傲岸不遜な悪め、お前から正義の道を教えてやろうか。本気で俺がそう思い始めた時、不意に通路の向こうが静かになった。

「……？」

「これは……」

銃声が消えた。それまでやかましくがなりたてていた分、いざ収まるとその後来る静寂がより強く感じられた。わずかな残響も強く耳に響いてくる。

それも無くなり、かわりに通路の向こうから乾いた靴音が響いてくる。音からして、四人。

「来るか？」

「こいつと同じ連中だろう」

俺がそう言つて気絶したジョナサンの額を叩くと、ダニエルが意地の悪い笑みを浮かべながら立ちあがった。

「わかったよ。僕が行ってくる」

「殊勝な心がけだ」

「少しは労ってくれよ……」

リズムのずれた、複数の足音が大きくなっていく。ため息をもらしながら、平静を保ったままダニエルが角から躍り出た。

「さ、来いよ」

足音が鳴りやんだ。

遮るように目の前に現れた一人のダニエルとかいう男を見て、執事二人とメイド二人は失笑と軽い屈辱を覚えた。

たった一人で何が出来る？ 思わず口元を緩めると、それに気付いたのか、男が左手をこちらに伸ばし、指だけを曲げて手招きをしてくる。それが四人の逆鱗に触れたのは言うまでも無かった。

「上等だ」

「ミンチにしてやる」

執事二人が正面から男に飛びかかり、メイドが斜めに飛び上がって壁を蹴り、左右から挟み撃ちにするよう襲いかかる。執事の手にはナイフ、メイドには拳銃が両手に一丁ずつ握られていた。

先に男に牙をむいたのはメイド二人だった。握りしめた銃把のはみ出した部分を使い、ほぼ同じタイミングで左右の鎖骨めがけて殴りかかる。

しかしダニエルは余裕の表情で一步飛びのいてそれをかわす。そして最初の一撃をかわされたメイド二人は、両手と片膝をついてその場に跪く格好になった。二人が跪くと同時に、今度は執事二人がメイドを飛び越えて猛然とダニエルに襲いかかる。

「なんて連携だ。隙が無い」

ダニエルが呟く。執事二人が同じスピード、同じタイミングでダニエルの左右の首筋へとナイフを伸ばす。

「躊躇も無い」

二本の刃が左右の首筋に同時に触れようとした刹那、ダニエルが両手を伸ばしてそれぞれのナイフを持った腕を掴む。

間髪をいれずにメイドが上方から二人同時に襲いかかる。

「まるで機械だな！」

ダニエルがそう叫ぶと、執事の腕を掴んだまま、ダニエルが両腕を高々と掲げた。そして上半身をわずかに後ろに反らす。

「しま……！！」

ダニエルが何をしようとしているのか、ここでメイドが気付いた。  
しかし今更減速も出来ない。

「シヤラアアアア！」

ダニエルが勢いよく腕を振り下ろす。

自らの懷に飛びかかってくるメイドめがけて、ハンマーと化した  
執事がその背中から直撃する。

自身の体重にダニエルの腕力。

四人の意識が刈られるのは造作も無かった。

## 第六話 LD ?

ダニエルが執事やメイドを簀巻きにしていたところ、パーシーたちは同じ構造をした通路内で足止めを食らっていた。

「まったくでんでんバラバラ撃ちおつて！弾だつてそれなりに金がかかるんだぞ！」

「こつも狭い中で弾幕を張られちゃ、進みようが無いぞ」

通路の向こう、そこにあるドアを守るように従者たちが展開する。そして彼らは全員が機関銃や突撃銃を手に持ち、通路全体をカバーするように容赦なく銃を撃ちまくった。その爆発音のような銃声と共に襲いかかる弾丸の嵐に毒づきながら、キースがパーシーに吠えるように言った。

「おいパーシー！あん時みたいな動きで突破できないのか！」

「あいにくと僕は弾丸まではかわせないのね。彼らみたいな一級ヒーローとはほんのちよつと性能が違うのだ」

「まあ、お前はヒーローって柄じゃないよな……じゃあなにか？ほとぼりが冷めるまでこつやってじつとしてろつてのか？」

「弾切れを待つのか。それもあたりだな。よし、それで」

そつパーシーが言いかけた時、それまで我が物顔で鳴り響いていた銃撃音がぱたりとやんだ。空薬莢が地面を叩き、虚しく音を立てる。

「なんだ？」

突然のことに戸惑いつつ、パーシーが角から顔を出して辺りを見回す。通路のあちこちに人間が倒れ、一番奥のドアの前に見慣れないメイド服姿の女性がいるのが見えた。

女とパーシーの目が合う。

「こんにちは」女が軽く会釈する。

「やあ、どうも」パーシーが立ち上がつて、当然のようにそれに答える。

「いい天気ですね」

「や、まったくですな」

「ここは屋内ですよ？」

「社交辞令というやつですよ」

その後二人はしばらく黙りこみ、やがて二人して声を殺すように笑い始めた。ついていけなかったのはキースだった。

「お、おい、何やってるんだお前」

「挨拶されたら挨拶で返すのが大人というものだろう。違うかね？」

「そう言う意味じゃなくてな……」

「とにかく僕は挨拶をするぞ。誰が何と言おうとだ」

友人というには縁遠い男の軽率な行動をたしなめるキースに対し、パーシーが勝ち誇った口調で言い返す。それを見て愉快そうに小さく笑みを浮かべながら、メイドが二人に向けて言った。

「パーシー様に、キース様ですね？こちらへどうぞ。ご友人の皆さまがお待ちです」

「友人？」

「あんたは？何者なんだ？」

「あ、これは失礼しました」

メイドが恭しく一礼する。

「私、トレイル家に勤めているゾフィーと申します。以後お見知りおきを」



## 第六話 LD ?

そこは通路と同じくらい真つ白な直方体状の部屋。六角形状の部屋と同じくらいの広さであり、部屋の上部には四角いモニターがいくつも据えられていた。壁に埋め込まれる様に規則的に並んだ半透明のシリンダーには銀色の液体がなみなみと注がれ、それらのシリンダーにそれぞれ一つずつ、コンピューターが据え付けられていた。中央部にはテーブルと資料、コンピューターや機械類が同じく規則的に並べられていた。

その部屋の四隅には一つずつ扉が置かれ、ダニエルたちはその右側手前の扉の前で待ちぼうけを食っていた。

「げ、あいつら」

左側の扉から現れた二人組を見て、ダニエルが苦い顔になる。ゴードンが顔を歪ませ、露骨に嫌な雰囲気露わにした。

「なんであいつらがここにいる？」

「そんなのこつちが知りたいよ。パーシーはともかく、なんでキースまでいるんだ？」

「僕が職務質問に答えたからだ！」

二人の元に歩み寄りながらパーシーが答える。両者の間にはそれなりの距離があるのだが、パーシーはそこから二人の会話を聞きとったのだろうか？だとしたら恐ろしいまでの地獄耳だ。

「職務質問とは何だ？貴様は何をした？」

だがゴードンは、そんなことお構いなしに平然とパーシーに語りかけていた。だが職務質問という単語が彼の琴線に触れたらしい。今のゴードンの口調は犯罪者への『尋問』をする時の物だ。

「答える。何をした」

だがパーシーは動じない。いつも通りの軽い口調で言い返す。

「別に何もしていないさ。ただちよつと街の方で殺しがあって、そいつがちよつと君たちに訳ありな奴だったのさ」

「なんだって？」

「殺人はこっちの街で起きてしまったらしいね。でも起きたことは事実だから、予言は当たった訳だ」

「不謹慎な事言っくんじゃねえよ。俺が説明するから黙ってる」

自信満々に言っただけのパーシーをはたきながら、後からやってきたキースが代わって自分たちがここに来た理由を話し始めた。

バッシュという男が死体で見つかったこと。

バッシュがダニエルとゴードンの名前の書かれた紙片を握っていたこと。

ゴードンを匿っているパーシーの元に行ってみたこと。

二人はいなかったが、二人の居場所（トレイル家に通じる人間もそこにいるというオマケ付き）を教える代わりに自分もそこに連れて行けとパーシーがゴネたこと。

行ってみたらまんまと罠にはまったこと。

「まあ、こんな感じだな……どうした？」

あらかた話し終えた時点で、キースが目の前二人の顔を見やる。そしてそこにある表情を見て、キースは思わず眉をひそめた。

「おい、どうしたっていうんだ？そんな顔して」

二人は啞然としていた。目と口を開け、その場に立ちつくしていた。キースは今まで、彼らのそんな顔を見たことが無かった。

だが今の二人に、キースの姿は頭の中には入っていなかった。代わりに数時間前にマフィアの一人から聞いた一連の言葉を頭の中で反芻していた。

戦力を集める。

ヒーローを味方につける。

「奴め」

「本気だったのか……」

「そういうことです」

そう言って、キースたちが出て来た扉から、二人を待たせていた元凶が姿を現した。

「ゾフィー」

「やつと来たか」

「申し訳ありません。こちらにいた連中を片づけるのに少々手間取ってしまいました」

担いでいた長筒状のバズーカ砲を地面に放り落しながら、ゾフィーが申し訳なさそうに言う。

「ですが、あらかた片付いたので当分は大丈夫でしょう」

「そうか。ならいい加減話してもらおうか」

ゴードンが一步前が出る。そして無言のプレッシャーを撒き散らしながら、ゾフィーの元に近づいていく。他の三人もそれに続いた。「何をお話すればよいのでしょうか。私がここにいますことでしょうか？」

「全部だ」

ゴードンが恫喝するようにゾフィーに言う。ゾフィーはそのゴードンの視線を怯むことなく受け止め、やがてゆっくりと目を閉じた。

## 第六話 LD ?

「こちらに」

やがてゾフィーが目を開き、そう言いながら中央のテーブルへ歩き出す。つられる様に四人も後をその追った。

やがて五人がテーブルの周りに集まる。それを見たゾフィーはテーブルに置いてあった資料の束の一つを手に取り、ゆっくり中身を吟味するようにそれをめくり始めた。

「ところで皆様」

視線を資料に移したまま、おもむろにゾフィーが口を開いた。

「『完全な兵士』であるために必要な要素は、何だと思えますか？」

「なんだよ、藪から棒に」

「戦場に赴く兵士にとって最も必要とされる要素、兵士であるために絶対不可欠なスキルは、一体何だと思われますか？」

ゾフィーが資料から目を離し、じっとキースの方を見つめる。どこか威圧感を感じながら、キースが答えた。

「そりゃあ、あれだろ。銃の取り扱いの上手さだとか、スタミナとか」

「確かにそれも重要かもしれないがな、もっと根本的に必要なものがあると思うぞ？」

パーシーが上から目線で言い放つ。額に青筋を立て始めたキースを片手で抑えながら、ダニエルが言った。

「根本的に必要なもの……愛国心？」

「そんなクサイものではない！もっとドロドロでリアルなものだ！」

「まるでわからないよ。大体君はそれがなんなのか、わかって言ってるのか？」

「……耐性」

ダニエルとパーシーの言い争いを遮るようにゴードンが口を開いた。

「耐性？」

「人殺しに対する耐性だ。ダニエル、戦場における兵士の最低限の仕事は何だ？」

「……人殺しか」

「そうだ」

そこまで言つて、ゴードンがゾフィーの方を見る。後を継ぐようにゾフィーが言った。

「戦争に勝つために、何より自分が生き残るために、一人でも多くの敵を排除する。それが兵士の務めです。そして戦争において最も優秀な兵士は、最も多くの敵を殺した者でもある」

「酷い話だぜ。警察じゃそういうのは連続殺人犯として処理されるつてのに。戦場でそれをやらかした奴には勲章が贈られるんだからな」

「そう。戦場では大量殺人者こそが一番の英雄なのです。しかしたとえ敵一個大隊を一人で皆殺しに出来る程の力を持っていたとしても、それを進んで実行しようと言う者はいないでしょう。もし実行したとしても、その人間は確実に精神を病むか、直後に軍を辞める」

「なぜ？」

「理性が邪魔をするからです。良心と言つてもいい。人間の中に存在する欲望のストッパー。そして人一人殺す度にその良心が悲鳴をあげ、それに逆らった罰として自ら心に傷をつけていく。そしてそれは意識のないし無意識的に蓄積され、後になって確実に心と体を蝕んでいく」

「そしてその人間を兵士として駄目にする。悪夢、トラウマ、シエルショックやPTSD。これらは全て己の理性や倫理観に逆らつて殺人を繰り返したが故の反動であり、その人間の兵士としての価値を大きく下げる物でもある。敵を前にして引き金を引けない兵士などタダの的でしかない。戦場に行けない兵士など論外だ」

再び横から割って入ったゴードンが、ゾフィーの言葉を勝手に引き継ぐ。

「兵士にとって人殺しがステータスだと言うならば、そんな風に『ポイント稼ぎ』にブレーキをかけようとする良心や理性など邪魔なものだ。だがそれは決して消せるものではない」

「しかし完全であるためには消さねばならないのです。そんなものは邪魔なだけですから」

「だが消すと言って消せるものではないぞ。どうしようっていうんだ？」

パーシーが明後日の方を見ながら言った。ゾフィーがそれに返す。「確かにこれは簡単に消せる類の物ではありません。そもそもそう言った良心や理性などというものは、その人間が生まれた時から持っているものではない。その人間が何十年と生きていく中で己の中に蓄積されていった社会通念や常識によって自らが無意識に作成した、この世界を無難に生きていくための一つの指標であり、この世界のルールブックなのです」

ゾフィーがそこで言葉を切り、再び話し始める。

「さて、その人間が築いて来た『指標』ですが、それは果たして人間のどこに存在すると思いますか？」

「どこって……どこだ？」

「キース刑事。もう少し頭を柔らかくした方がいい」

「脳筋で悪かったな。で、どこなんだ？」

「決まっているだろう。ここだ」

パーシーがそう言って、自分の頭を人差し指で叩く。

「人間は頭でモノを考える。ならばモノを考える際に参考にする教科書の類も当然そこに収められている。だよな」

「ええ。そうです」

「ああ、言われてみれば確かに……で、それがどうしたっていうんだ？」

「まだわからんのか？ そうした『その人間にとっての倫理や一般常識』が全部頭の中に入っているのなら、『脳味噌の中にまだ何も入っていない空っぽな状態』の頭と、今現在その人間の持っている頭

をこつそり取り替えてやればいいのだ。だよね！」

「まさか、そんなバカな事が」

「ええ。そうです」

「え？」

予想外の返答にダニエルが素で驚いた声を出す。

「本気で言ってるのか？」

「ええ。もっとも、脳そのものを取りかえるのではなく、対象者が元々持っている脳を、別に用意したサンプルの脳の形に近づける。

別の言い方をすれば、薬品投与や脳手術などで脳を別パターンの物に作りかえる」

「冗談じゃないのか？」

「出来るのかよ、そんなこと」

「可能です。あなた方がここに来るまでに会った執事やメイドが、まさにそれですから」

「じゃあ何か。その手術とかのおかげで、あいつらの頭の中は、自分の物とは違う誰かさんの脳そのものに作りかえられてるって言うのか？」

「はい」

「科学の神秘だ！」

とんでもないことをさらりと言つてのけるゾフィー。ダニエルとキースは啞然としていたが、パーシーは興味深そうに笑みを浮かべながら叫び声を上げた。ゴードンは顔の筋肉一つ動かさなかった。

## 第六話 LD ?

「おい待て、いきなりそんなこと言われて、俺たちが信じるとでも思ってるのか？」

「待つてくれキース刑事。それを言い合っても埒が明かない。今はそれが成立しているものとして話を進めよう」

ダニエルが食い下がるキースをなだめるが、当の本人も釈然としないのか渋い顔をしていた。

「一つ質問していいかな？」

「はい、構いません」

「もし、もしだ。もしそんなことが出来たとして、その肝心のサンプルに一体誰を使うっていうんだ？同じ人間の物を使うっていうのなら、その人間なりの理性って言うのがあるはずだろう。脳の形を作りかえた際にそれまでコピーしてしまうかもしれない」

そして今度は、そのベースにした人間の持っていた理性に縛られる。元の木阿弥だ。言外にそう告げるダニエルの言葉に、ゾフィーが頷きながら言った。

「確かに。ベースにする相手が同じ人間である以上、そのような懸念はあつてしかるべきです。むしろそれこそが、この手法を取る際の最大の問題でもあった。まさか犬猫の頭をサンプルに使う訳にも行きませんからね。容量やら形やらが根本的に違う」

「なら、どうするんだ？」  
「簡単です。倫理観や良心を全く持つていない人間の脳を使えばいい」

あたりの空気があからさまに変わる。今までの話の流れから、そんな奴がいる筈ないと誰もが考えていた。だがゾフィーの表情は堅く、口調は至って真面目だった。

「理性の欠落した、あるいは常人や常人の形成する社会とはズレた倫理観を持つ人間の脳を入手し、対象者の脳をそのサンプルのパタ



ーンに近付けねば……」

「お、おいおい、いるのかよ、そんな奴」

「はい、いますよ」

「本当にいると思っっているのか。どんな人間にも理性や倫理というのは存在しているぞ。例え救いような無い悪でも、豆粒程度には残っているんだぞ。一パーセント程度でも残っているのなら、それは完全とは行かない」

「ええ、存在します」

ゴードンの脅しにも似た言及にも全く動じない。するとゾフィーがダニエルの方を向きながら言った。

「そしてダニエルさん。おそらく貴方は、貴方がたの中ではその人物のことを一番よく知っているはずです」

「僕が？どうして？」

「私から、いえ、屋敷への道すがら、その人間の話を聞いたと自分から言っただけではないですか」

「そんな、一体誰のこと……」

そこまで来て、ダニエルの思考が止まる。脳裏に一人の存在が現れる。思考がその存在に集中される。

「奴か」

「ご明察の通りです」

「おい、ダニエル、誰なんだそいつは？」

「刑事が知らないのも無理ありませんよ。そいつは大昔のこっこの人間ですから」

「だから、誰なんだよそいつは」

キースの追及に、大きく息を吐いてからダニエルが言った。

「オドネル・アッシュ」

「オドネル？」

「気狂いの殺人鬼」

何かを吐き出すようにダニエルが呟く。それを聞いたゴードンが眉根を吊り上げた。

「死んだはずだ」

「ああそうなんだ……って、君も知ってるのか？」

「前に聞いた」

ゴードンがあっさりいつてのけるが、置いてけぼりを食らっていたキースは一人混乱していた。

「おいおい、話の線が見えねえよ。俺にもわかるように筋道立てて説明させてくれ」

「そんなわけもわからぬ説明など放っておけ！言葉ではなく心で感じるのだ！全ては天上よりもたらされる御意志なのだ！」

パーシーは考えることを放棄し、別次元にトリップしていた。彼を無視してダニエルがキースにオドネルのことを説明し始める。

数分後、大体のことを理解したキースは、それと同時に顔を歪ませた。

「馬鹿じゃねえの？」

「僕に言われても困るよ。僕だって意味がわからないんだから」

「確かに、オドネルはずっと前の人間。今彼は骨として土の下で眠っています。脳なんて欠片も残っていない」

「だったらどうする気だ？お前のことだ、まだ何か隠してるんだろう」

ゴードンが威圧するようにゾフィーに言い放つ。それを聞いたゾフィーが澄まし顔で言った。

「オドネル・アッシュのアッシュ、なんて書くかご存知ですか？」

「アッシュの綴り？A、S、Hじゃねえのか？」

「少し特殊なんです。彼の場合の綴りはH A S H。H、A、S、Hと書くんです」

「頭がH？そりやおかしいな」

「おかしいでしょう。それでは次に、トレイルグループの現当主、ゼオン様のフルネームは？」

「ゼオン？あの大企業のトップか。確かあいつは、ゼオン……」  
全員の思考が止まる。

「ゼオン・H・トレイル」

「奴の脳か」

「冗談だろ？」

ゾフィーが自分の腕を抱き寄せて俯き、弱弱しく呟いた。  
「冗談ではありません」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5806u/>

---

くそたれなヒーロー共

2011年8月23日03時33分発行